

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第314集

惣前町遺跡発掘調査報告書

一般国道4号水沢東バイパス改築工事事業関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

惣前町遺跡発掘調査報告書

一般国道4号水沢東バイパス改築工事事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺跡を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面それまでに闇につつまれていた先人の営みに光明があたることも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存をする処置をとって参りました。

本報告書は、一般国道4号水沢東バイパス改築工事事業に関連して平成10年度に発掘調査を実施した水沢市の惣前町遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって縄文時代末～弥生時代の土坑や平安時代の住居跡、それら遺構に伴う遺物によりこの地が大きく分けて二時期にわたる生活地であったことがわかりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所や水沢市教育委員会を始めとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成12年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船 越 昭 治

例　　言

1. 本報告書は、岩手県水沢市佐倉河字惣前町15-1ほかに所在する惣前町遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般国道4号水沢東バイパス改築工事事業に伴い岩手県教育委員会と建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 本遺跡の成果は、平成10年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査第311集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表してきたが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は以下のとおりである。

遺跡番号・・・・N E 17-1026 遺跡略号・・・S Z T-98

5. 調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

調査期間 平成10年6月30日～9月1日

調査面積 2,700m²

調査担当者 木戸口俊子・佐々木志麻

6. 室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。

室内整理期間 平成10年11月1日～平成11年3月15日

整理担当者 佐々木志麻・木戸口俊子

7. 本報告書の執筆は「Ⅱ 立地と環境」を佐々木志麻、そのほかを木戸口俊子が担当した。

8. 分析・鑑定及び委託業務は次の方々に依頼した。

石質鑑定 花崗岩研究会

基準点測量 (株) 舟山コンサルタント

9. 国土地理院発行の地図を複製したものは図中に図幅名と縮尺を記した。第5図の調査区周辺図は2,500分の1の水沢都市計画図を原寸で複製し使用した。

10. 遺構の埋土観察には、農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を参考にした。

11. 本報告書に掲載した実測図の凡例については、「Ⅲ 調査方法と整理方法」に記したとおりである。

12. 発掘調査においては水沢市教育委員会をはじめ地元の方々にご協力をいただいた。

13. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序
例言

〈本 文〉

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	
1. 遺跡の位置	2
2. 地形・地質	2
3. 基本層序	3
4. 周辺の遺跡	3
III 調査方法と整理方法	
1. 野外調査	8
2. 整理方法	11
IV 調査結果	
1. 調査概要	12
2. 遺構	
1) 純文時代晩期末～弥生時代の遺構	12
2) 平安時代の遺構	20
3) その他の遺構	24
3. 遺構外出土遺物	
1) 土器	25
2) 石器	28
V まとめ	29
報告書抄録	52

〈図 版〉

第1図 岩手県図	1
第2図 地形図	2
第3図 基本層序	3
第4図 遺跡位置及び周辺の遺跡図	5
第5図 遺構配置図	9・10
第6図 1号土坑・出土遺物	13
第7図 2号土坑・3号土坑・出土遺物	14
第8図 4号土坑・5号土坑・出土遺物	16
第9図 6号土坑～9号土坑・出土遺物	17
第10図 10号土坑・出土遺物	18
第11図 11号～14号土坑・出土遺物	19
第12図 15号土坑・出土遺物	21
第13図 積穴住居跡	22
第14図 積穴住居跡内出土遺物	23
第15図 積穴状遺構・出土遺物	24
第16図 1号溝・出土遺物	25
第17図 2号溝・3号溝・出土遺物	26
第18図 柱穴状ピット・出土遺物	27
第19図 遺構外出土土器	30
第20図 遺構外出土石器(1)	31
第21図 遺構外出土石器(2)	32

〈表〉

第1表 周辺の遺跡表(1)	6
第2表 周辺の遺跡表(2)	7
第3表 柱穴状ピット表(1)	27
第4表 柱穴状ピット表(2)	28
第5表 土器観察表(1)	33
第6表 土器観察表(2)	34
第7表 石器観察表	34

〈写真図版〉

写真図版 1	調査区遠景・近景……………	37	写真図版 8	柱穴状ビット ・調査区周辺状況……………	44
写真図版 2	調査前風景・基本層序		写真図版 9	出土土器（1）……………	45
	・堅穴住居跡①……………	38	写真図版10	出土土器（2）……………	46
写真図版 3	堅穴住居跡②・堅穴状遺構		写真図版11	出土土器（3）……………	47
	・1号土坑……………	39	写真図版12	出土土器（4）……………	48
写真図版 4	2号土坑～6号土坑……………	40	写真図版13	出土石器（1）……………	49
写真図版 5	7号土坑～10号土坑……………	41	写真図版14	出土石器（2）……………	50
写真図版 6	11号土坑～14号土坑……………	42	写真図版15	出土石器（3）……………	51
写真図版 7	15号土坑・溝……………	43			

I 調査に至る経過

惣前町遺跡は、「一般国道4号水沢東バイパス改築工事」の施行に伴ってその事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約835kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈となっている主要幹線道路である。

水沢東バイパスは水沢市真城と同市佐倉河の間約9.6kmの区間で計画されている。水沢市街地には、すでに昭和45年9月に水沢バイパスが開通しているが、水沢市内を通過する国道4号の交通混雑解消等と東北縦貫自動車道、東北新幹線水沢江刺駅への高速アクセス機能を高めるため、昭和60年度に事業着手し、昭和63年度に用地着手、平成4年度に工事着手した。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、24遺跡が確認されている。惣前町遺跡については平成9年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて、岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会が建設省東北地方建設局岩手工事事務所との協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成10年度事業について、平成10年1月29日付け「教文第902号」により、財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成10年6月1日付けで岩手工事事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、6月30日から惣前町遺跡の発掘調査に着手した。



第1図 岩手県図

II 立地と環境

1. 遺跡の位置

惣前町遺跡は、水沢市佐倉河字惣前町15-1ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅から北東に約2.1km、四丑橋より西に0.2kmに位置する。北上山地と奥羽山脈に挟まれた県南部にある水沢市は、北に金ヶ崎町、西に胆沢町、東は江刺市と隣接していて、面積は96km余りである。江刺市との市境近くにある本遺跡は、県道玉里水沢線、さらに北上川に向かって東流する境田堰とに挟まれた北上川西岸の微高地に位置する。北緯39°09'00"、東経141°09'00"付近にあり、標高は約38mである。

2. 地形・地質

水沢市は、東北最長の大河北上川中流域に位置し、市のほぼ中央を北上川が北から南流する。この川を挟んだ東西の地形は、大きく異なった様相を呈している。東側では、北上山地南辺に連なる丘陵が迫り、北上川に注ぐ伊手川、広瀬川等により開拓された小段丘が若干見られ、そこに集落が形成されている。一方、川の西側では、胆沢平野と呼ばれる平坦地が広がる。北上川の支流である胆沢川-衣川の間は、北上川流域最大の扇状地である。その上には広大な段丘が展開しているが、これらは、上位段丘である人首段丘、中位段丘である胆沢段丘、下位段丘である水沢段丘に大別することができる。その中で最大域を占めているのが胆沢段丘であり、胆沢段丘はさらに細かく高位から順に上野原、横道、堀切、福原の各段丘に分けられる。そしてその先に水沢段丘が続いている。水沢段丘の中央部は開拓が進み、大規模な沖積面(凹面)が走り南北に二分される形となる。これが水沢低位段丘であり、この段丘の縁辺部に立地しているのが惣前町遺跡で、北上川から西に800m余りのところである。

調査区は元は宅地、畠地、水田であったところで、水量が豊富な境田堰が北上川に向かってすぐ南を流れている。周囲は平坦地で見渡せば一面水田地帯であるが、近年は郊外型の大型商店が進出している地域である。四丑橋を渡れば江刺市という水沢市の東端であるが、新たに道路が通ることにより、おそらく景観の変化は免れないだろう。

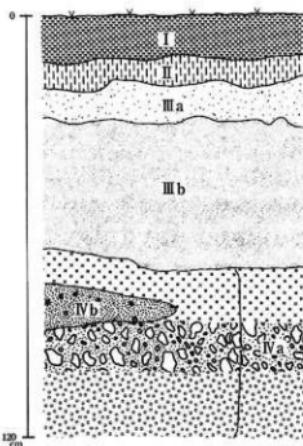


第2図 地形図

3. 基本層序

調査区の中で最も擾乱の影響が少ない南側部分を基本層序とした。

- I : 10Y R 4 / 4 暗褐色 粘性わずかにあり しまりあり
酸化鉄が糸状に全体に入る 耕作土
- II : 10Y R 4 / 2 - 4 / 3 灰黄褐色～にぶい黄褐色 粘性なし しまりあり 酸化鉄糸状に全体に入る (I層より多)
炭化物ごく微量入る 下位10Y R 5 / 8 黄褐色 酸化鉄
- III a : 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性・しまりあり 酸化鉄が糸状に入る検出面
- III b : 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色 砂 粘性なし しまりややあり 酸化鉄糸状に縦に入る
- IV a : 上位10Y R 3 / 2 黒褐色粘土 粘性あり しまりややあり 酸化鉄少量含む 中位疊層(大) 下位 疠層(小)
- IV b : 10Y R 2 / 1 黒 粘性あり しまりなし 疠を多量に含む



第3図 基本層序

4. 周辺の遺跡

惣前町遺跡のある水沢市は、平安時代の遺跡の多いところで、本遺跡でも弥生・平安時代の遺構・遺物が見つかっている。ここでは、本遺跡の周辺にある遺跡のうちのいくつかについて述べたい。

本遺跡のすぐ南側では、中前田遺跡、横枕遺跡といった弥生・平安期の遺跡が知られているが、横枕遺跡では、縄文時代晚期の遺物包含層の存在が指摘されている。その近くの東袖ノ目遺跡も平安時代の集落跡として知られていたが、近年発掘調査が行われ、縄文時代晚期大洞C 2-A式期・弥生時代後期の遺物包含層と、その下から堅穴住居跡が確認された。また、中世・近世の遺構もいくつか検出している。

東袖ノ目遺跡から南西約1kmにある常磐広町遺跡は、周知の通り県内で初めて確認された弥生時代の遺跡である。この遺跡は、岩手県南地域に米食が伝わってきていた証拠となった紡績のある土器が出土した。また、一部が欠けているアメリカ式石器が入った合口甕棺が、さらにその下から検出した堅穴遺構からは管玉やガラス玉が出土している。

その南400mにある常磐小学校遺跡は、奈良時代の遺跡である。中心地にはその名の通り常磐小学校があり小学校周辺もこの遺跡の範囲に含まれ、これまでの調査により奈良時代後半の集落跡であることが分かれている。

四丑橋の下流小谷木橋の辺には水沢競馬場があるが、その西側に杉の堂という大規模な遺跡がある。杉の堂遺跡は明治30年代には発掘調査が実施されるなど早くから知られていた遺跡の一つで、縄文時代晚期の遺跡として有名であり、堅穴住居や貯蔵穴、そして墓塚10基ほどが集中している状態を検出したこともある。さらに、平安時代の住居跡も見つかっており、発掘調査を重ねる度に豊富な資料を提供してくれている。また、杉の堂遺跡の南側にも、大学遺跡、沼尻遺跡等の縄文・平安の複合遺跡が広がっている。

四丑橋より上流の北上川沿いにも、東鍛冶屋遺跡、鳴館西遺跡、沢田遺跡、佐野原遺跡等の縄文・平安の複合遺跡が存在する。それらのうち、沢田遺跡は、平成5・6年に当センターで発掘調査を行い、縄文時代

早期の土器片を出土したほか、縄文時代中期の土塁垣設が、縄文時代晚期終末～弥生時代初頭の捨て場、平安時代の住居跡を検出した。また、佐野原遺跡もここ数年当センターで調査しているが、堅穴住居跡や土坑類を検出し、また出土した遺物から縄文、平安、中世にわたる集落跡であることが判明してきている。

佐野原遺跡の北約1kmのところには、白井坂I・II遺跡がある。白井坂別名お伊勢館は中世の城館跡で、空堀複郭が確認されていたが、平成4年以降に当センターにより本格的な調査が行われた。その結果、5つの郭とそれそれに伴う建物跡、溝跡、堀跡、柵跡、門跡等の施設を検出し、遺物も陶磁器、かわらけ、金属製品などが出土した。これらの結果から、白井坂遺跡は15世紀初頭から約200年の間、この地域の統治の拠点であったと考えられている。加えて、縄文時代の遺構、遺物も出ており、断続的な人間の生活の場であったことが分かっている。

白井坂遺跡の西約2kmにある面塚遺跡は、古墳・奈良時代の遺跡として知られていたが、昭和55年の調査では、古墳時代後期と思われる古式土師器を伴う住居跡を検出している。平成10年には胆沢町の角塚古墳の調査が久方ぶりに行われた。また同古墳の北約2kmにある中半入遺跡では、同時代の遺構、遺物が調査されるなど古墳時代の様子が徐々にではあるが明らかになりつつある。面塚遺跡も、角塚古墳に関連する遺跡として今後の調査が期待される遺跡の一つである。

胆沢川と北上川との合流地点の西岸には、国指定史跡である胆沢城がある。その外郭線の規模は、一辺約670mと言われており、敷地の現状は大部分が果樹園と水田である。毎年のように水沢市教育委員会主体で調査が行われており、胆沢城の全貌を探る努力が為されている。鎮守府が多賀城から移されてより、蝦夷の支配拠点であった胆沢城は、この時代の東北の姿を解明する上で欠かせない遺跡であることは疑いのないところであろう。

胆沢城の近くには勝性遺跡があるが、ここでは古墳・奈良・平安にかけての住居跡を数多く検出している。各時代にわたる住居の変遷、集落の営まれ方などを考える上で重要な遺跡である。

北上川の東岸、水沢市羽川町にある外浦洗田遺跡は、平安時代の須恵器の窯跡と見られる遺跡である。窯跡は、今まで1基見つかっただけであるが、須恵器の壺、壺、長頸瓶などが出土した。胆沢城との関連も考えられ、周辺にはさらに数基の窯跡があると見られている。

以上、懇前町遺跡の周辺の遺跡について述べてきたが、水沢市内の主な遺跡のごく一部に過ぎない。その他の遺跡については図表を参照されたいが、市内にはそれ以外にも多数の重要な遺跡が存在している。平成10年岩手県教育委員会文化課遺跡台帳には、水沢市内で303カ所の遺跡が登録されているが、その中で最も多いのは平安時代の遺跡で、複合遺跡も含めれば約6割が平安時代にかかっている。平安時代の東北を知るには文字資料が少ないこともあり、各遺跡の調査・解明が必要であることはいうまでもない。今後の発掘調査の成果とともに、各方面からの検討も交えることでさらに深い追求が可能となるであろう。

<参考文献>

- 1988 「弓手の遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター
- 1997 「水沢遺跡群範囲確認調査」 岩手県・水沢市文化財報告書第31集 水沢市教育委員会
- 1996 沢田・仙人塚遺跡発掘調査報告書 弓手県文化振興事業部埋蔵文化財調査報告書第230集 (財) 岩垣文
- 1997 白井坂I・II遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業部埋蔵文化財調査報告書第248集 (財) 岩垣文
- 1998 北野背遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業部埋蔵文化財調査報告書第272集 (財) 岩垣文
- 1996 猿が馬遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業部埋蔵文化財調査報告書第243集 (財) 岩垣文
- 1983 杉の平遺跡 岩手県・水沢市文化財報告書第10集 水沢市教育委員会
- 1995 常磐小学校遺跡 水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第4集 水沢市埋蔵文化財調査センター



第4図 遺跡位置及び周辺の遺跡図

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代
1	沼の上	散布地	縄文土器(後・晩期)、石匙、石獣、石錐、打製石斧、椎石、炭化物	縄文
2	沼の上Ⅱ	散布地	土師器	古代
3	耳取	散布地	土師器	古代
4	新川Ⅱ	散布地	土師器	古代
5	宮地	集落跡	土師器、須恵器	古代
6	浅中野	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・古代
7	三百刈田	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・古代
8	朴ノ木	散布地	土師器	古代
9	下楚田	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・古代
10	寺田Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器	縄文・古代
11	寺田	散布地	弥生土器、土師器、須恵器	弥生・古代
12	豊田城	城廻跡	土師器、須恵器	古代
13	五位塚古墳群 占墳	冢		
14	後田Ⅰ	散布地	土師器	古代
15	鴻ノ巣館	城廻跡・集落跡	土師器、須恵器、住居跡、塙	(平安)・古代
16	力石Ⅲ	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文・弥生・古代
17	人塚	散布地	土師器、須恵器	古代
18	中塙敷	散布地	土師器、須恵器	古代
19	前山田	散布地	土師器	古代
20	御免	散布地	縄文土器	縄文
21	四丘	古戦場		
22	鹿野	散布地	縄文土器	縄文・平安
23	利根堂	散布地	石獣	縄文
24	窪田	散布地		平安
25	外浦浅田	空路	須恵器	平安
26	旧羽田中	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・平安
27	北輪木方八丁	城廻跡	縄文土器、塙、復郭、平場	縄文・中世
28	鶴ノ木佐吉	散布地	縄文土器(中・後・晩期)、土師器、須恵器、打製石斧、管玉、柱穴状ゴット	縄文
29	鶴ノ木南古地	散布地	縄文土器、アメリカ式石獣、すり切り石斧	縄文・弥生
30	鶴ノ木新田南	散布地	縄文土器	縄文・平安
31	桜無	散布地・環濠	土師器(平安時代)	平安
32	北白山Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	平安
33	元大神前Ⅱ	散布地	土師器、須恵器	平安
34	柿体東壹目	散布地	土師器、須恵器	平安
35	寺西南	散布地	土師器、須恵器	平安
36	大内山前	散布地	土師器、須恵器	平安
37	水ノ口前東	散布地	土師器	平安
38	北野Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器、陶器	平安
39	北野Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	平安
40	林前Ⅱ	散布地	土師器、須恵器	平安
41	林前Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器	平安
42	北余月	散布地	土師器	平安
43	石名坂	集落跡	縄文土器、石獣	縄文
44	坂ノ内Ⅲ	散布地	縄文土器、土師器、フンマーク	縄文・平安
45	大学Ⅱ	散布地	土師器、フレーク	縄文・平安
46	大学Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
47	沼尾	散布地	土師器	平安
48	杉の堂	散布地	縄文土器(後・晩期)、人洞、火形益、壺、深鉢注口	縄文・平安
49	跡川井	集落跡	土師器、須恵器	奈良
50	常磐小学校	散布地	土師器、須恵器	奈良
51	石塙	集落跡	土師器、須恵器	平安
52	常磐広町	集落跡	弥生土器、石獣、アメリカ式行燈	弥生・奈良・平安
53	野川	散布地	土師器、石獣	縄文・平安
54	北出Ⅱ	散布地	土師器、鉄洋	弥生・奈良・平安

第1表 周辺の遺跡表 (1)

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代
55	北出Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	弥生・平安
56	北出Ⅱ	集落跡	須恵器	平安
57	久根委	散布地	毒口クロ土師器、須恵器	奈良
58	東袖ノ目	集落跡	土師器	平安
59	櫻松	散布地	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
60	中前田	集落跡	弥生上器、土師器、須恵器	弥生・平安
61	杉ヶ崎	散布地	土師器、フレーク	縄文・平安
62	大中	散布地	土師器、須恵器	平安
63	蟹沢	集落跡	須恵器	平安
64	東殿治屋	散布地	土師器、フレーク	縄文・平安
65	沢田	散布地	土師器、フレーク	縄文・平安
66	鳴原(郡須川館)	城輪跡	堀、土塁	中・近世
67	鳴原東	散布地	縄文上器	縄文
68	鳴原西	散布地	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
69	笠石	散布地	縄文土器	縄文
70	下河原駕船	散布地	土師器	平安
71	佐野原	集落跡	土師器、須恵器、石器	縄文・平安
72	天井戸町	散布地	縄文土器	縄文
73	東崩Ⅱ	散布地	土師器	平安
74	吹張Ⅱ	散布地	土師器	平安
75	吹張Ⅰ	散布地	土師器	平安
76	白井坂Ⅱ	城輪跡	空堀、復郭	中世
77	白井坂Ⅰ	城輪跡	空堀、復郭	中世
78	藤古	集落跡	須恵器	縄文・平安
79	八幡市	集落跡	縄文土器(後期)、石器、石繩、小型石斧	縄文
80	瓦岡	集落跡	土師器、須恵器	平安
81	朝沢城(方八丁)	城輪跡	土師器、須恵器、郭	平安
82	西作	集落跡	土師器、須恵器、フレーク	古墳・平安
83	對子鼻	散布地	土師器、須恵器	平安
84	大曾根	散布地	縄文土器、土師器、スクレーパー、フレーク	縄文
85	東大畠Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器、石器	縄文・平安
86	東大畠Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
87	南家	散布地・集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・吉墳・奈良
88	庭園	散布地	土師器、須恵器	平安
89	道本	散布地	土師器、須恵器	平安
90	東幅	散布地	縄文土器	縄文
91	久凹	散布地	土師器、須恵器	平安
92	里塙	集落跡	縄文土器(晚期)、石器、土偶	縄文
93	水沢城(裏書)	城輪跡		中世
94	南久中	集落跡	土師器、須恵器	平安
95	高屋敷	集落跡	土師器、須恵器	平安
96	坂上	散布地	縄文上器(年間)	縄文
97	中ノ目	散布地	土師器	平安
98	福原	集落跡	土師器、須恵器	平安
99	雲ヶ馬場	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・平安
100	須江	集落跡	土師器、須恵器	平安
101	上野	散布地	土師器、須恵器	平安
102	大塙	集落跡	土師器、須恵器	平安
103	藍神Ⅰ	集落跡	土師器、須恵器	平安
104	高田	集落跡	土師器、須恵器	平安
105	中林下	集落跡	土師器、須恵器	平安
106	中林上	集落跡	土師器、須恵器	平安
107	堀ヶ沢Ⅱ	集落跡	土師器、須恵器	平安

第2表 周辺の遺跡表(2)

III 調査方法と整理方法

1. 野外調査

1) グリットの設定

調査区において、調査上最適かつ公共座標の第X系の区切りの良い値である地点を基準点1とし、そこから南へ40m延長したところに基準点2を、同様に基準点2から東へ20m延長したところに補点1を設けた。大グリットはこの基準点1と基準点2が起点となるように、北から40m間隔でA・B・Cとアルファベットを、東から西にI・IIと昇順する数字を当てて組んだ。さらに4m間隔で東西南北をそれぞれ10等分し、南北をa・b・cとアルファベットを、東西を1・2・3・・・と昇順する数字を当てて小グリットとした。基準点及び補点の座標軸及び高さの値は次のとおりである。

基準点1	X = -94,280.000	Y = 28,680.000	H = 38.212m
基準点2	X = -94,320.000	Y = 28,680.000	H = 38.336m
補点1	X = -94,320.000	Y = 28,700.000	H = 38.179m

2) 粗掘と精査

調査区の現状は、家屋の基礎が残っている場所、畠地、水田の3つに分けられる。それぞれに南北及び東西に細長く数本のトレンチを入れ、遺物出土状況と遺構検出面の把握を行った。水田として使用されていた耕作土からはほとんど遺物が出土しないため、重機により除去することにした。畠地についてもほぼ同じ厚さで遺構検出面にいたるため水田部分と同様に表土は重機により除去した。家屋の基礎が残っている所については基礎のコンクリート部分を重機により取り除いた。重機稼働後は人手により徐々に層を下げ遺構検出に努めた。

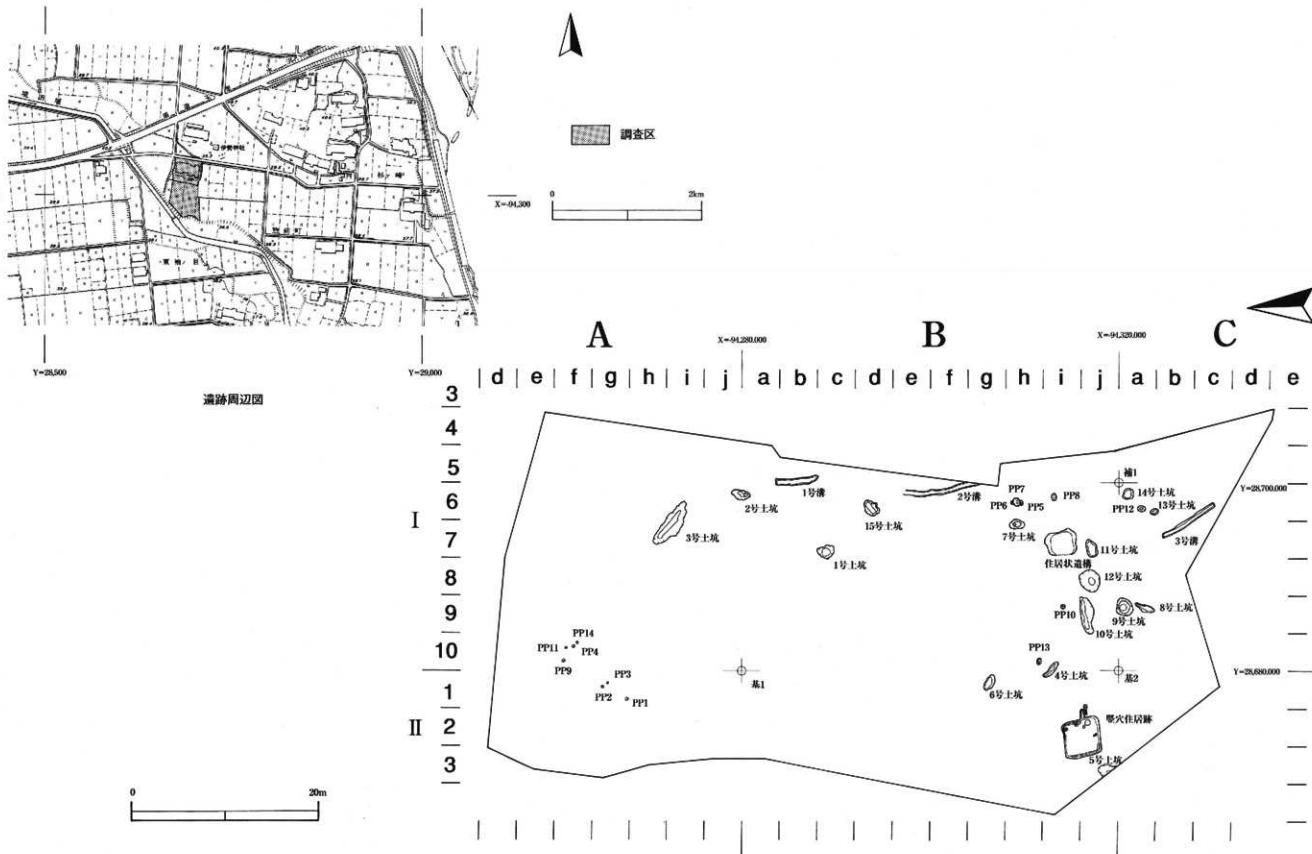
精査は、基本的に2分法による埋土観察を行った。また、住居跡など面的に広がりを持つ場合には4分法を用い観察を行った。個々の遺構が面的に不明で重なりを持ちそうな部分については一部トレンチを入れたところもある。

遺物の取り上げは、遺構内からの出土は遺構名と埋土層位を記入し、遺構外の場合は小グリット単位で層位を記入して取り上げている。調査初期のトレンチ入れの際に出土した遺物は、その時点においてまだ小グリットは設定していないためトレンチ名・層位のみで取り上げ、後にグリット名を入れたものがある。

3) 遺構の記録

遺構の記録には、主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものにはフィールドカードに記録した。作図は座標系に合わせた1mメッシュを基本とする簡易造方測量と平板測量の両方を用い、遺構の平面形、焼土・遺物の検出状況を記録した平面図、遺構の埋土堆積状況や遺物の出土状況を記録した断面図を作成した。縮尺は基本的には20分の1とし、作図上40分の1、60分の1で作成したものもある。遺物の出土状況については、よりわかりやすく正確に実測するために10分の1で作成した。

写真は、遺構の埋土堆積状況、まとまって遺物が出土した場合にはその出土状況、遺構の完掘状況（焼土については検出状況を含む）というように精査の段階ごとに撮影している。フィルムは35mmのモノクロームとリバーサルフィルム、さらに6×7判のものも使用した。



第5図 遺構配置図

2. 整理方法

図面の点検・遺物の洗浄・写真の整理は、原則として野外調査と並行して行うこととしたが、調査終了同時に出土した遺物及び写真など一部は野外調査終了後に行った。

1) 遺構図面

遺構図面は、点検後に第2原図を作成した。挿図中の縮尺は40分の1を原則とし、任意の縮尺についてはスケールを付してある。なお、使用したスクリーントーンの種類は凡例の通りである。

2) 遺物

遺物は、洗浄後全出土遺物を点検し、遺構内外に分けて注記・接合・復元を行い、その後報告書に掲載するものを選択・登録を行った。そして、写真撮影・実測（土器の場合拓本含む）・トレース・図版作成と作業を進めた。

報告書に掲載した遺物の選択基準は、遺構内出土についてはできる限り掲載するようにし、遺構外出土については接合復元で実測可能になったもの、口縁部資料として原形が推測できるものを選択・掲載した。

石器については、遺構内出土のものは全て、遺構外出土は剥片石器などは欠損部のないものを選択、砾石器は数が少ないので全て掲載することとした。観察表には掲載した全ての遺物を記載してある。挿図中の縮尺は、土器は3分の1、石器は2分の1を原則としているが、任意の縮尺の場合にはスケールを各図版中に付してある。

3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し台帳に記載した。遺物写真は、土器については接合状況の良好な立体写真的可能なもの、小破片、土製品の順に、石器については土器の後に、石錐などの剥片石器、砾石器などの大きい石器、石製品の順に35mmフィルムで撮影し、現像後撮影順に整理を行った。なお、遺物撮影は当センターの写真技師が担当した。図版中の縮尺は、土器は3分の1、石器は2分の1を原則としているが、任意の縮尺については各図版中にスケールを付してある。

〈凡例〉



IV 調査結果

1. 調査概要

調査区の約3分の1を占める水田部分では、表土から20cm～50cmほどで検出面となる。そのため大半の遺構の上部が削られ搅乱を受けている状態である。また、埴造であったところは径1mほどの円形を呈する穴が10基を超えて掘られているが、いずれも埋土底部からプラスチックなどでできた日用雑器等が見つかり現代に埋られたものであった。また、家屋が建っていたところは調査に入る段階においてもコンクリートの基礎があり、重機による除去を行い遺構検出を行ったが、基礎の他に水道管などのパイプも深く入り込んでおり、相当の搅乱を受けている。以上のように調査区全体が搅乱を受けている状態だが、比較的残りの良かった水田部分から遺構が集中して見つかった。また、家屋の基礎の影響を受けていない部分から数基の遺構が見つかっている。今回の調査で検出された遺構は、縄文時代晩期末～弥生時代初頭と思われる土坑が15基、平安時代と見られる堅穴住居跡が1棟、堅穴状遺構が1棟、時代不明の溝状遺構が3条、柱穴状ピットが14基である。

遺物は、縄文時代晩期末～弥生時代の土器と平安時代の土師器須恵器を合わせて大コンテナで1.5箱、石器は55点出土している。

2. 遺構

1) 縄文時代晩期末～弥生時代の遺構

〈1号土坑〉(第6図、遺物－第6・7図・写真図版9・13)

TB 7c グリッドから検出している。長軸180cm、短軸142cmの楕円形を呈している。断面形はすり鉢状を呈しており、深さは16cmである。埋土は1層のみで上位及び中位下で土器と石器が多く出土した。上位から出土した土器片と中位から出土した土器片とは接合するものもあった。出土状況は横位状態でこの場で壊れたような割れ方である。置かれたようなものではなく石器とともに一度に入り込んだものと思われる。

遺物は深鉢が多く、また浅鉢と見られる突起部分が1点見つかっている。1～3の土器はいずれも頸部が無文の地文のみで肩部が最も張り出す器形となっている。2は口唇部に小波状の押圧痕が巡っている。6は浅鉢の突起の一部と見られるが、細い沈線が突起上部と外面に施されている。

石器は凹石や磨石など3点が出土している。24は、中心が凹んでいる上に周辺が剥離されており、製作途中の環状石斧と思われる。

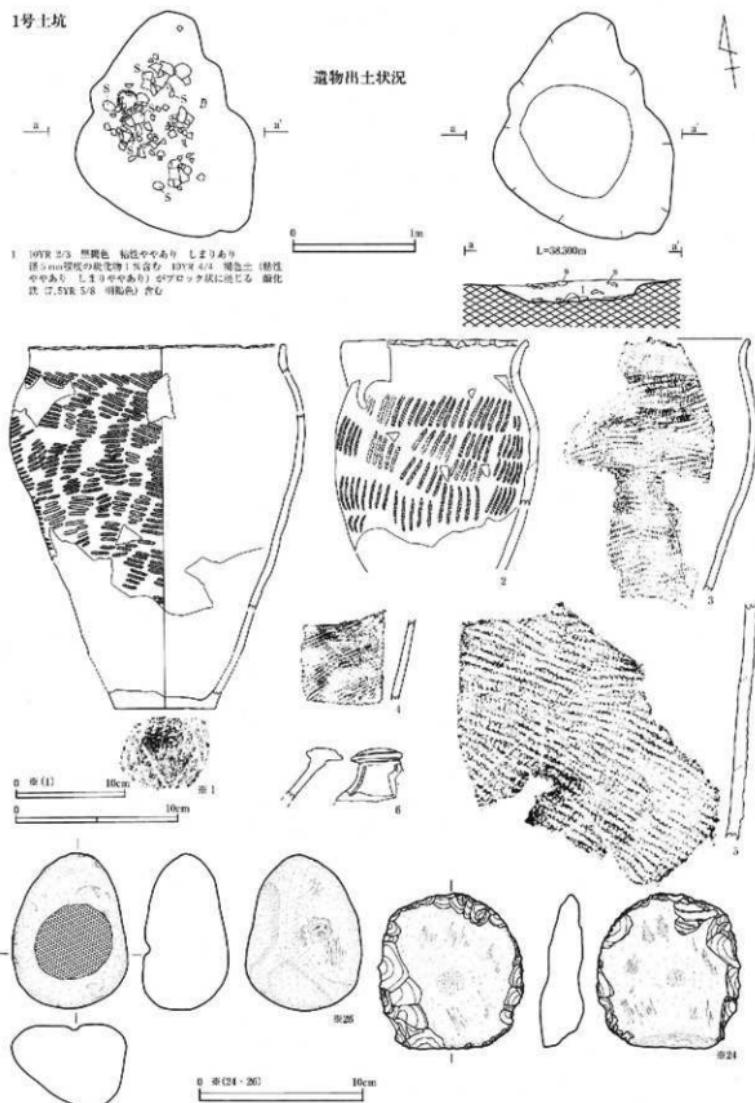
〈2号土坑〉(第7図、遺物－第7図・写真図版9)

1A 6 jと1B 6 a両グリッドにかかる検出している。長軸410cm、短軸104cmの楕円形を呈しており、断面形はすり鉢状で深さは37cmである。埋土中位より縄文時代晩期の土器片が出土している。中心部がさらに深くなっているが、楕円形の土坑が2基重なっているような状態であるが、検出面及び検査中に複数の土坑であることは確認できなかった。

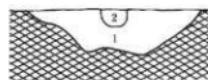
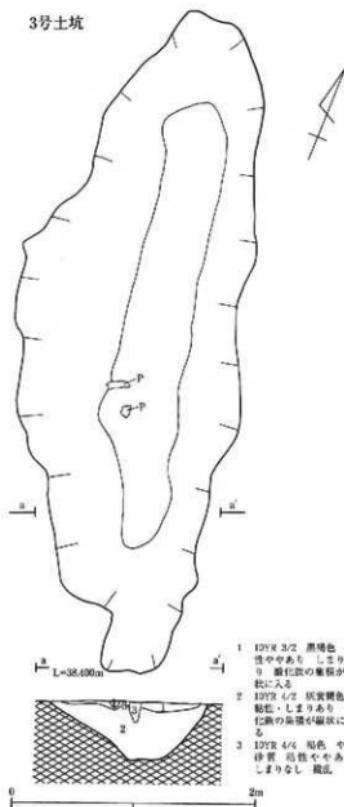
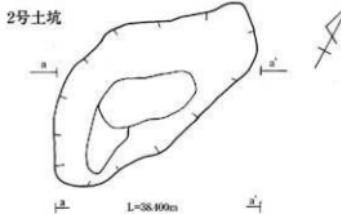
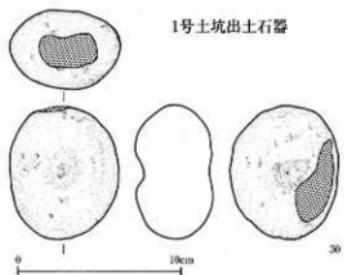
〈3号土坑〉(第7図、遺物－第7・8図・写真図版9・13)

1A 5 i、6 h、6 iグリッドにかかる検出された。規模は長軸548cm、短軸176cmで溝状に近い楕円形を有しており、断面形はすり鉢状で深さ45cmである。大変規模が大きいため、風倒木痕の可能性があるが、

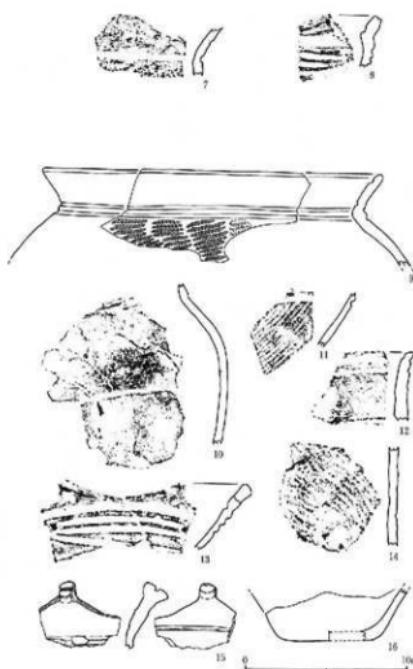
1号土坑



第6図 1号土坑・出土遺物



1 LOYR 3/2 黒褐色、粘性しまりやあり 炭化骨頭量に入る
合併に鉄化鉄の塊塊が炭灰に入る
2 LOYR 3/4 に付い黒褐色の砂質土がブロック状に10%入る
3 LOYR 4/4 黄色、粘性しまりなし 植生



第7図 2号土坑・3号土坑・出土遺物

床面や埋土状況から上坑扱いとした。遺物は埋土の下位から縄文時代晩期後半と見られる土器と磨石などの石器3点が出上している。13・15は浅鉢の突起部であるが、変形丁字文らしき文様が一部見られる。27は凹石であるが、磨石としても使用されていたようである。

〈4号土坑〉(第8図、遺物—第8図・写真図版9)

I B 10 i と II B 1 i 両グリットにかかる。長軸210cm、短軸54cmの溝状を呈する土坑である。深さは28cmと比較的浅い。陥し穴の下位部分が残ったものかとも思われたが、周辺には似たような遺構は見つからず、断定できなかった。遺物は崩下部まで縄文を施した高台部分が縄文土位から出土している。

〈5号土坑〉(第8図、遺物—第8図・写真図版9)

II B 3 j グリットから検出されている。南端に位置し調査区外にかかるため、遺構の全容は明らかでない。検出された遺構の規模は径180cm、深さは31cmである。平面から見て梢円形になるかもしれない。埋土は6層に分けられ、自然堆積である。埋土中位から土師器の甕の破片が出土している。ただし、北東隅には平安時代の住居跡があり、この住居跡の周辺からは同時期の遺物が見つかっていることなどから、当該遺構の埋土中位から出土した土器片は流れ込みの可能性が高く、遺構の時期を決定するものにはなり得ない。

〈6号土坑〉(第9図、遺物—第9図・写真図版9・13)

II B 1 g グリットから検出された。長軸178cm、短軸83cmの梢円形を呈する。断面形はすり鉢状で深さは40cmである。埋土中位から深鉢の胴部破片と石礫が1点出土している。

〈7号土坑〉(第9図、遺物—第9図・写真図版9・13)

I B 7 h グリットから検出されている。長軸は152cm、短軸95cmの梢円形を呈する。断面形はすり鉢状で深さは40cmである。埋土は4層に分かれ、深鉢の高台部分の破片と半分ほど欠損した凹石が埋土中位から出土している。

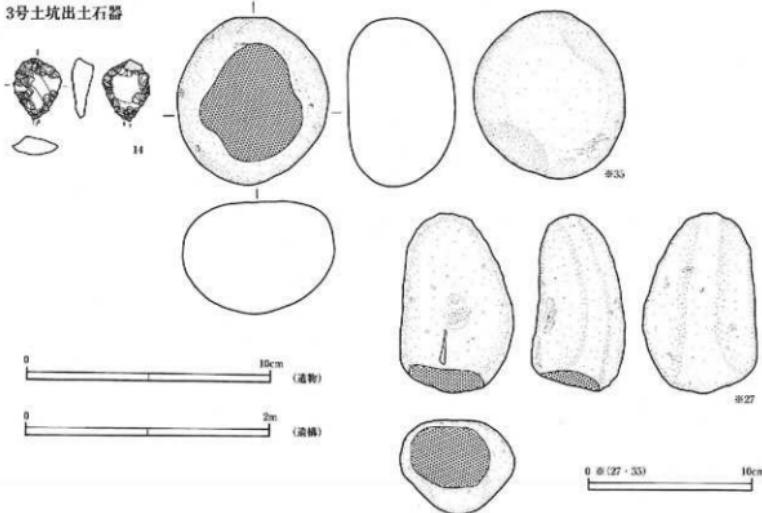
〈8号土坑〉(第9図)

I C 9 a グリットから検出している。長軸222cm、短軸77cmの溝状を呈する土坑である。深さは18cmと浅い。この土坑からは遺物は出土していない。

〈9号土坑〉(第9図)

I C 9 a グリットから検出している。長軸185cm、短軸157cmのやや梢円形を呈する。断面形はすり鉢状であり、深さは21cmと浅い。8号土坑と同様、この遺構からも遺物は出土していない。

3号土坑出土石器

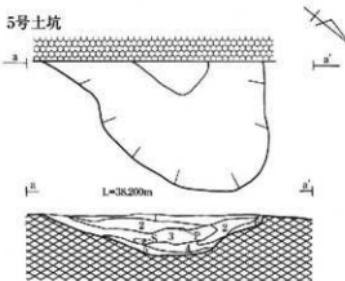


4号土坑



1. 10YR 3/2 黒褐色、粘性あり しまりややあり
炭化植物量に含む
2. 10YR 5/4 に近い灰褐色シルト質土、(粘性・しまりや
やあり)と10YR 4/2 灰褐色(粘性・しまりややあり)
との疊土。50%ザツ
全体に炭化植物の集積が入る

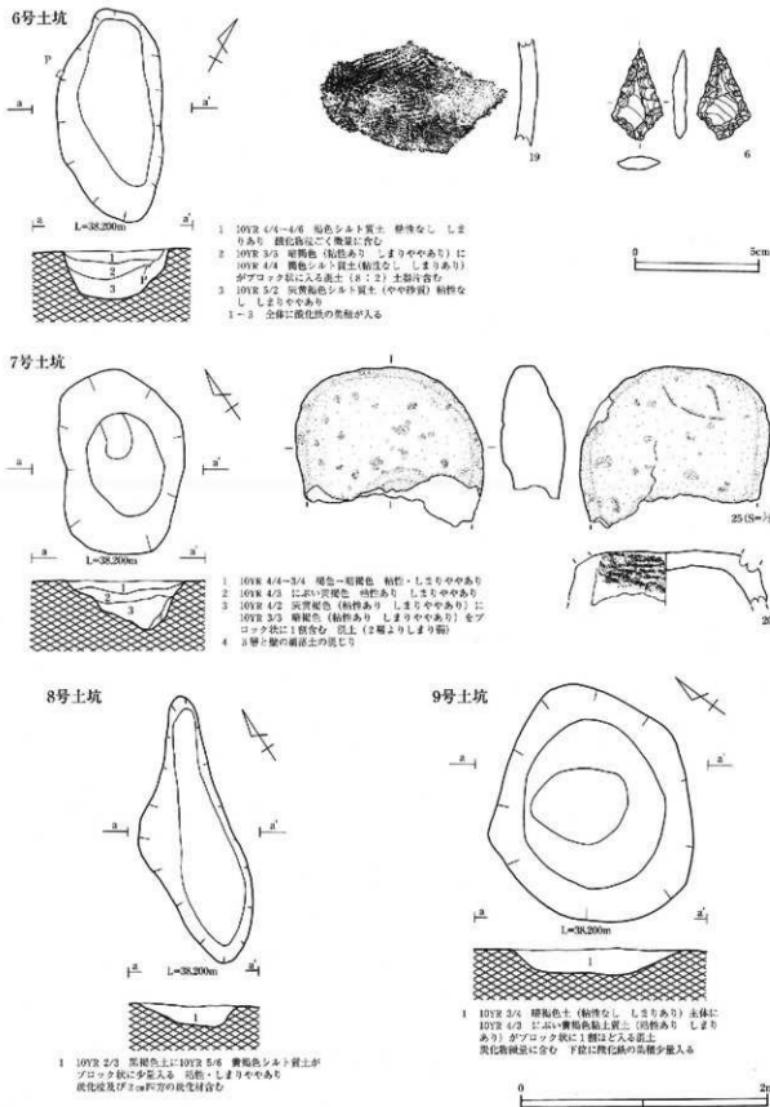
5号土坑



1. 10YR 4/2 に近い灰褐色、粉質シルト、粘性あり しまりあり
に近い灰褐色シルト質土、(粘性・しまりややあり) 土器含む
2. 10YR 5/4 黒褐色シルト質土、(粘性・しまりややあり) に近い灰褐色シルト質土、(粘性・しまりややあり)
3. 10YR 4/2 黑褐色、(粘性・しまりややあり)
4. 10YR 4/2 黑褐色、(粘性・しまりややあり)
5. 10YR 4/2 黑褐色、(粘性・しまりややあり)
6. 10YR 4/2 に近い灰褐色、粉質土、粘性わずかにあり
しまりややあり、2—6 全体に炭化植物の集積が入る



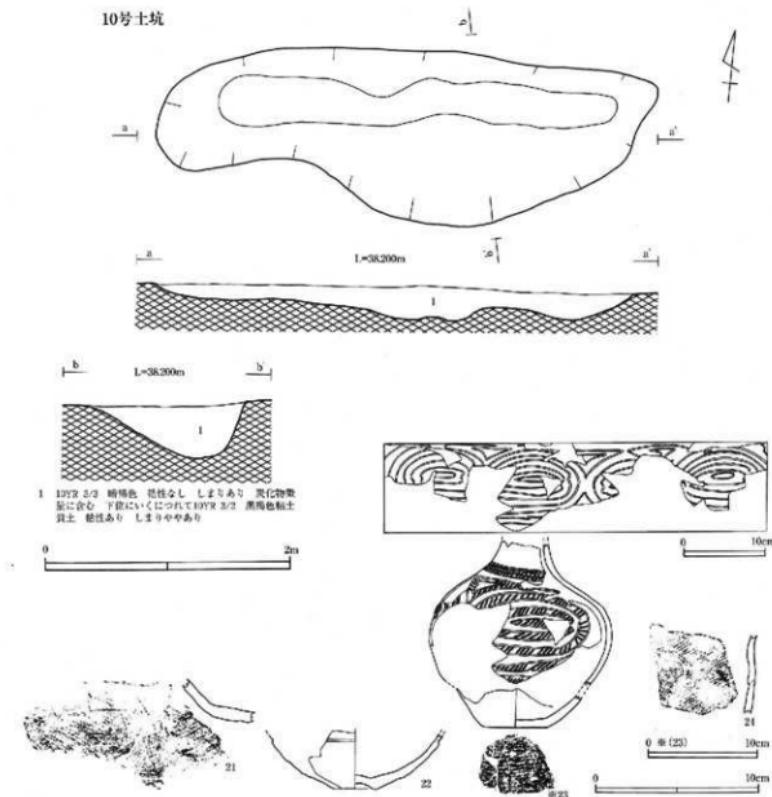
第8図 4号土坑・5号土坑・出土遺物



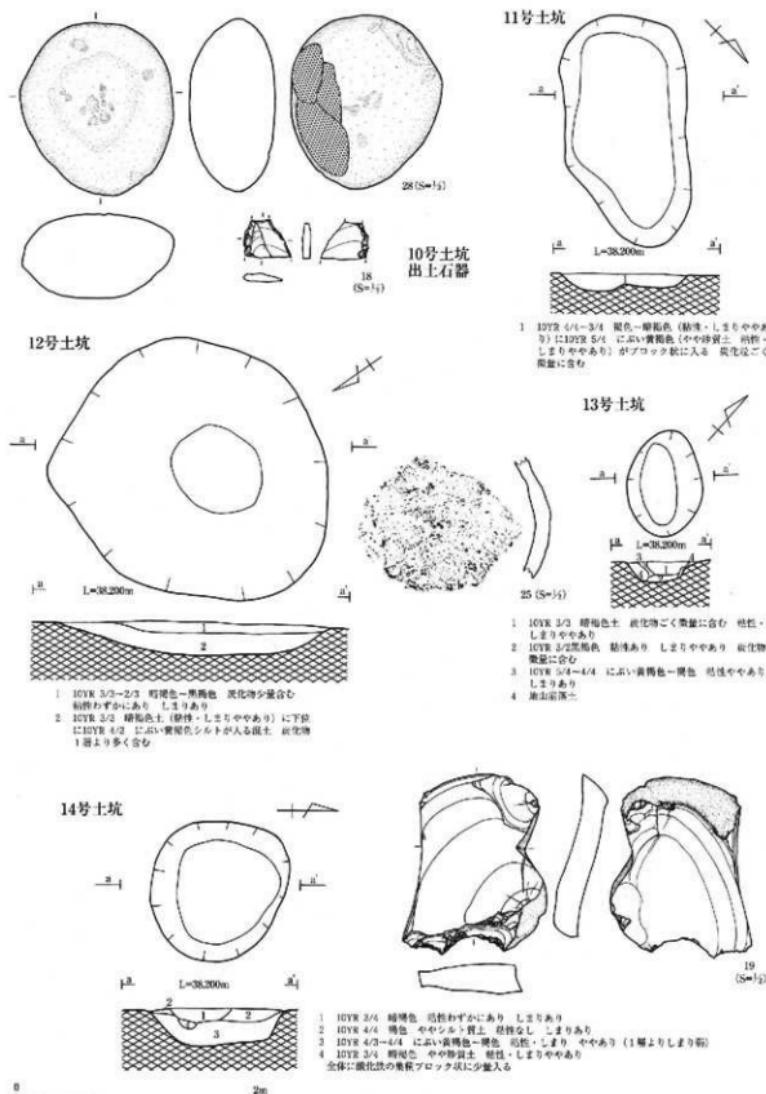
第9図 6号土坑～9号土坑・出土遺物

《10号土坑》（第10図、遺物—第10・11図・写真図版9・10・13・14）

I B 9 j グリットから検出された。長軸は406cm、短軸は142cmの溝状を呈しており、断面形はすり鉢状で最も深いところで45cmある。この土坑は当初複数の土坑かとも思われたが、精査を進めることによって埋土状況や同一個体の土器が出土するなどから同一遺構として取り扱うこととした。埋土は単層で中位～下位から破片ではあるが他の土坑と比べやや多くの縄文時代晩期末～弥生時代のものと思われる土器や石器が出土した。21～23はいずれも壺と見られ、23は特に接合率が高く口縁部は欠損しているものの全体の文様などおよそ把握できる。細い沈線で同心円を4カ所描き肩部にはその同心円間に三角形状に沈線を描いている。沈線間は細かな縄文が施されている。頸部の付け根には平行沈線が2条巡り、その間には同じ工具で小波状の沈線がやはり2条巡っている。



第10図 10号土坑・出土遺物



第11図 11号土坑～14号土坑・出土遺物

《11号土坑》(第11図)

I B 7 j グリットから検出された。長軸は192cm、短軸は101cmで楕円形を呈している。深さは15cmと大変浅いが底部は平らである。遺物は出土しておらず、時期は不明だが、周辺の出土遺物から縄文時代晩期末～弥生時代の遺構の可能性が高い。

《12号土坑》(第11図、遺物－第11図・写真図版10)

I B 8 j グリットから検出された。最大径228cmで平面形はほぼ円形を呈している。埋土は2層に分けられ、断面形がすり鉢状で28cmの深さを持つ。遺物は壺の崩部破片が出土している。焼成がひどく時期は不明である。

《13号土坑》(第11図)

I C 6 a グリットから検出された。長軸87cm、短軸61cmの楕円形を呈している。他の土坑よりもやや小型のものである。深さは18cmで遺物はほとんど出土していない。時期は不明だが11号土坑同様周辺の出土遺物から縄文時代晩期末～弥生時代の遺構の可能性が高い。

《14号土坑》(第11図、遺物－第11図・写真図版13)

I C 6 a グリット内の13号土坑の東壁から検出された。最大径125cmの平面形はほぼ円形を呈している。深さは31cmで石器が1点出土している。

《15号土坑》(第12図、遺物－第12図・写真図版10・13・15)

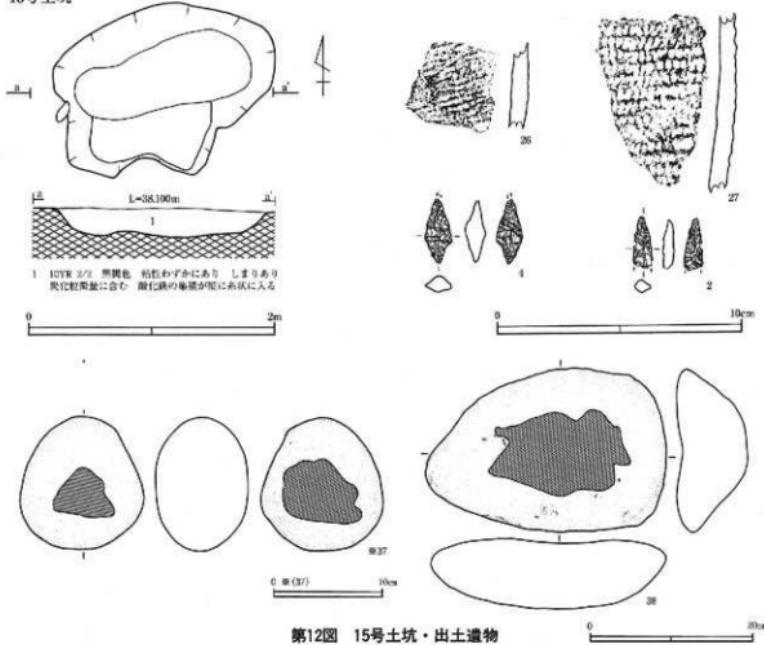
I B 6 d グリットから検出された。長軸182cm、短軸142cmの楕円形を呈する。埋土は単層で深さは25cmある。埋土下位から土器片及び石器が出土している。石器は石錐が2点の他、磨石・石皿が出土している。磨石と石皿は長軸方向の北東側に並んで出土し、セットで使用されたと見られる痕跡が残っている。

2) 平安時代の遺構

《塹穴住居跡》(第13図、遺物－第14図・写真図版10・13・14)

II B 2 i + 2 j グリットで検出されている。規模は一辺3m90cmの方形である。壁の高さは16cmであるが、削平されている可能性が高い。ほぼ東西方向に軸を持ち、カマドは東側壁のやや南寄りに設けられている。煙道の長さは1m15cmで煙出しの部分が明確ではない。燃焼部の焼土は30cmほどの不整形であり厚さを持たない。袖はほとんど残っておらず、若干の高まりを残すのみである。このカマドは作り替えがなされたようで旧カマドはさらに南側に作られている。焼土の厚さから旧カマドの燃焼部の方が長期間にわたり使用されたようである。煙出しはIIカマドの方が明確である。これらカマドを覆うように炭化物が積査時に見られた。炭化物は木材の原形を示すような残り方はしていなかった。また、東壁のカマド位置から北側の壁際と北壁のはば中央までの壁際、西側壁と南壁の一部に溝が巡っている。溝自体の深さはあまり深くなく数cm程度である。また、その溝に囲まれた範囲で遺物が出土している。北壁の溝の巡っていない西側は遺物がほとんど出土しない。そのため出入り口の可能性がある。貼り床らしいものは確認できなかった。床面を出してから柱穴状ピットが4基検出されたが、住居を支えた主柱穴として断定できたものはない。埋土は2層に分けられるが2層上面～床面にかけて遺物が最も多く出土した。

15号土坑

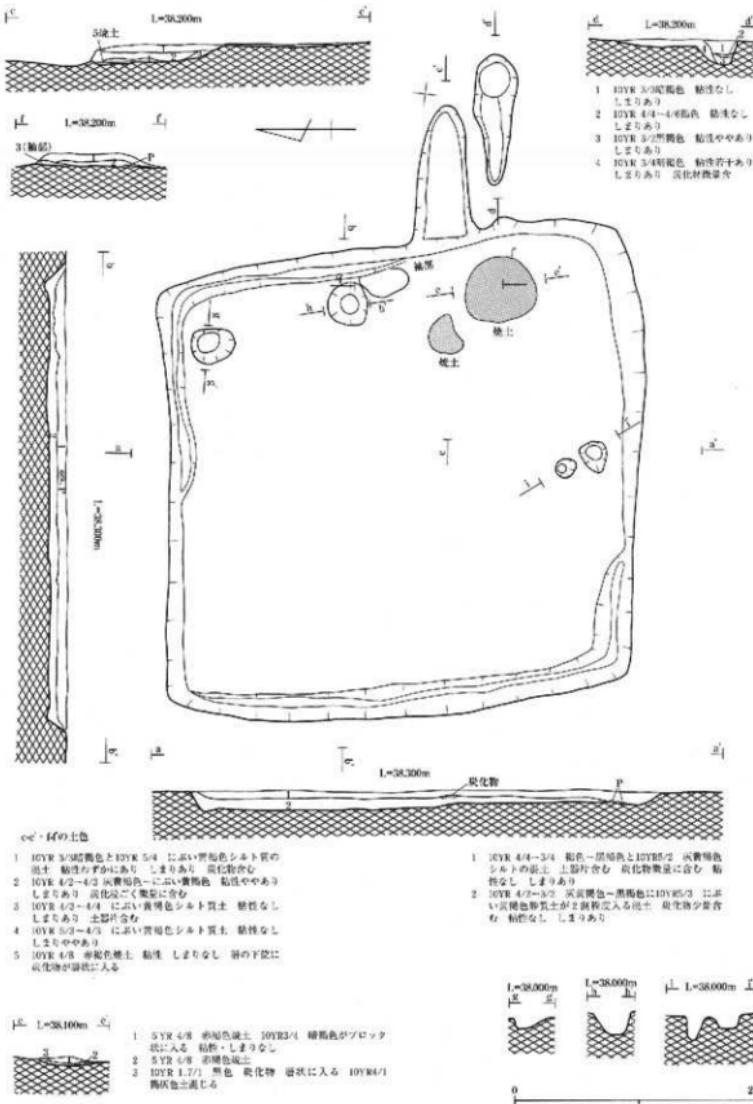


第12図 15号土坑・出土遺物

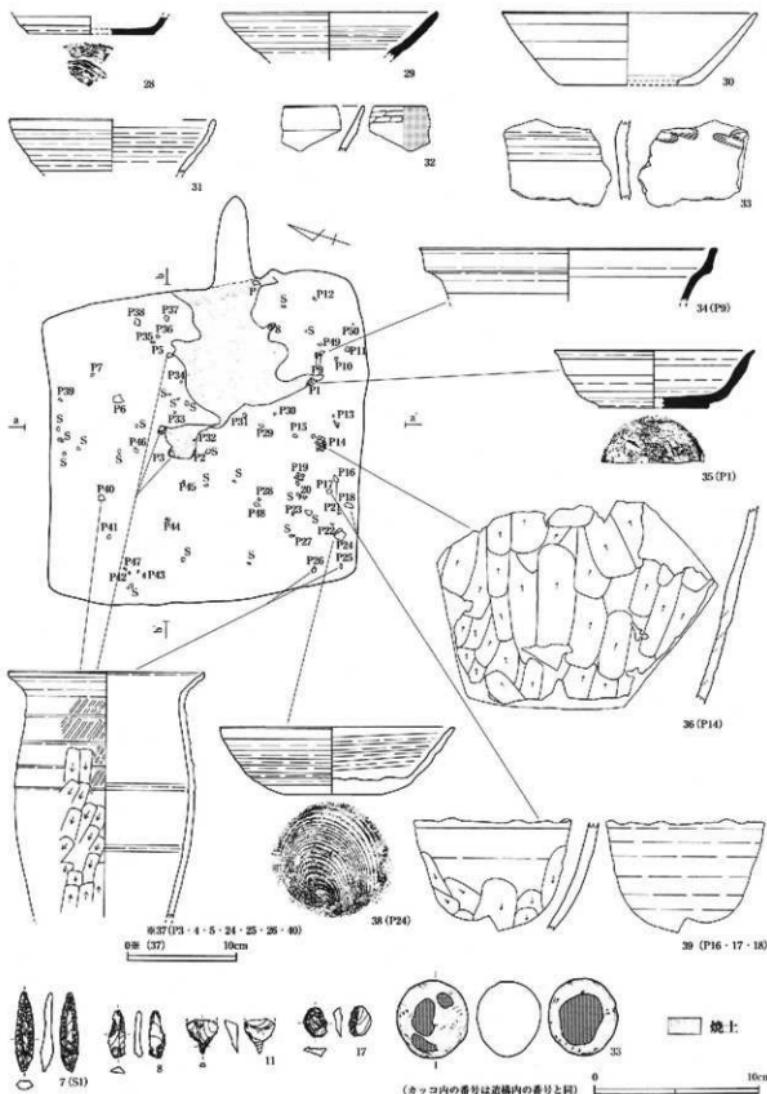
遺物は第14図のとおりである。掲載した土器は接合できたものや器種の明確なものである。30・31・32・38は、土師器のロクロ作りの壊で38は回転糸切り痕が残る。28・29・35は須恵器の壊で、29が底部から口縁部にかけて真っ直ぐに立ち上がるのにに対し、35はやや膨らみを持って立ち上がり口縁部は外反気味に薄く作られている。28は回転糸切りで、35は回転ヘラ切りである。34は須恵器の壺と見られる口縁部分である。この遺物については、残念ながら掲載した以外破片も見つかっていないが、口縁部から推測すると大型の壺と考えられる。33・36・37・39は土師器の壺の破片であるが、中でも37は口縁部～胴部まで接合可能だった長胴壺である。この土器は、肩部～胴部にかけてタタキを行った調整痕が明確に残っている。その他流れ込みと思われる石器も出土している。

〈竪穴状遺構〉(第15図、遺物—第15図・写真図版10)

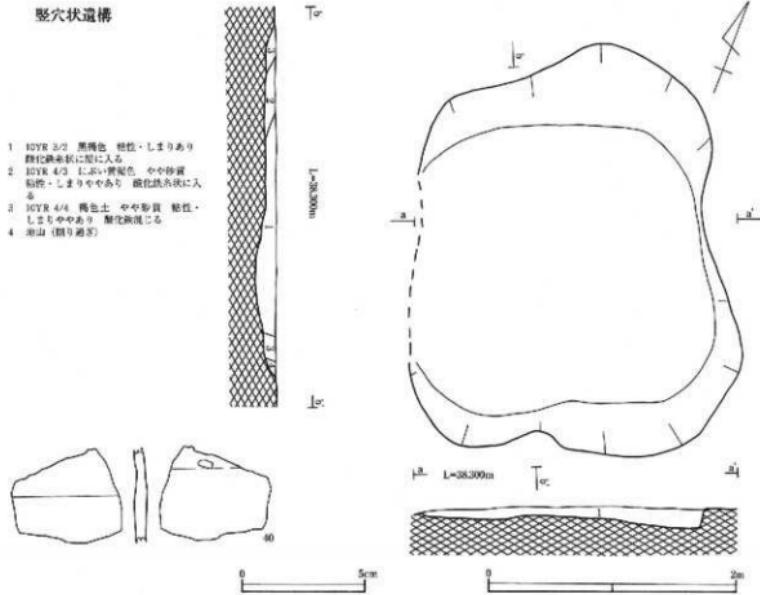
IB2 i グリットで検出されている。一辺の最長は3m35cmであり平面形は隅丸方形を呈している。壁の高さは最も残りの良いところで17cmあり東側では認められない。検出時は住居跡と考えられたが、精査を進めるにあたってカマドや柱穴状ピットなど住居跡と判断できるものは検出されなかった。遺物は、小片であるが土師器の壺と見られる胴部の破片が出土している。



第13図 積穴住居跡



第14図 積穴住居跡内出土遺物



第15図 積穴状遺構・出土遺物

3) その他の遺構

〈1号溝〉(第16図、遺物—第16図・写真図版10)

I B 5 b 6 b グリットから検出されている。検出された規模は4 m 55cmの長さで、最大幅は65cm、深さは8 cmである。南北方向に軸を持ち、どちらの方向とも徐々に浅くなり溝がなくなる。底部は平らで埋土はしまりがない。遺物は埋土上位から土器片が出土しているが、磨滅しており時期は不明である。

〈2号溝〉(第17図、遺物—第17図・写真図版10・11)

I B 5 e グリットから検出されている。1号溝同様南北方向に軸を持ち、南側は調査区外に延びている。北側は現代の水路により攪乱を受け途切れている。検出できた規模は長さ7 m 50cm、幅55cm、深さは8 cmである。遺物は縄文時代の土器片が埋土上部～中位から出土しているが、溝の時代決定に成りきれない。

1号溝と2号溝の間はすでに地山が見えていたため遺構は検出されていないが、これらの溝は検出状況、埋土状況、規模などから同一遺構である可能性があり、削平をかなり受けているものと思われる。

〈3号溝〉(第17図)

IC 6c・7b グリットから検出されている。北西-南東方向に軸を持ち、検出された規模は長さ6m 42cm、最大幅50cm、深さ12cmである。この溝の両端は立ち上がっており、調査区内で完結している。ただし深さから見て1号溝・2号溝同様削平を受けている可能性が大変高い。遺構内からの遺物の出土はない。

〈柱穴状ピット〉(第18図、遺物-第18図・写真図版11)

柱穴状ピットは全部で14基検出された。遺物はいずれも埋土上位-中位のものであり、遺構の時期決定するものには至らない。北西側に若干集中して検出されたが、この周辺は旧家屋が建っていたところで建物による搅乱がなければもっと柱穴状ピットが検出された可能性がある。残念ながら検出できた柱穴状ピットは建物が建つようなつながりはみられなかった。個々の規模、遺物出土状況、埋土状況は表のとおりである。

3. 遺構外出土遺物

1) 土器

今回の調査では、遺物の出土量は少なく前述したとおり全部で大コンテナ1.5箱分しか出土していない。遺構外出土の土器も当然少なく掲載できるほど接合した土器もわずかである。

出土遺物の時期は、遺構外出土の上器とほぼ同時期のものばかりで、大きくは2時期に分けられる。

I群 遺物番号56-69、72-74は縄文時代晩期末～弥生時代前半にかけてのものである。

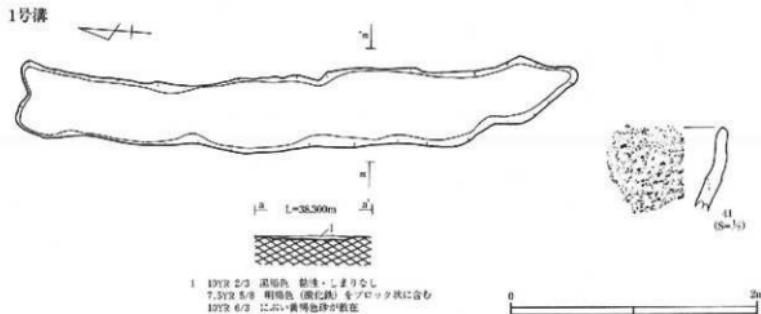
a : 深鉢もしくは壺

①口唇部押圧による小波状口縁となっているもの(60・62・63)。地文はL.R縄文が多く施され、頭部は無文である。

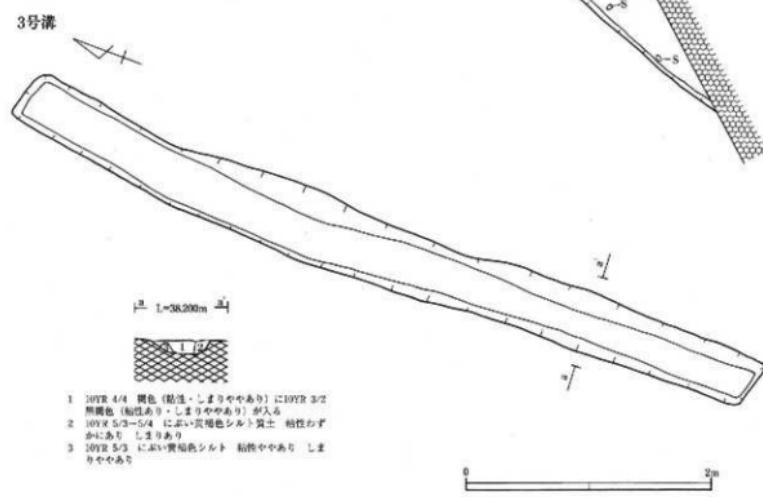
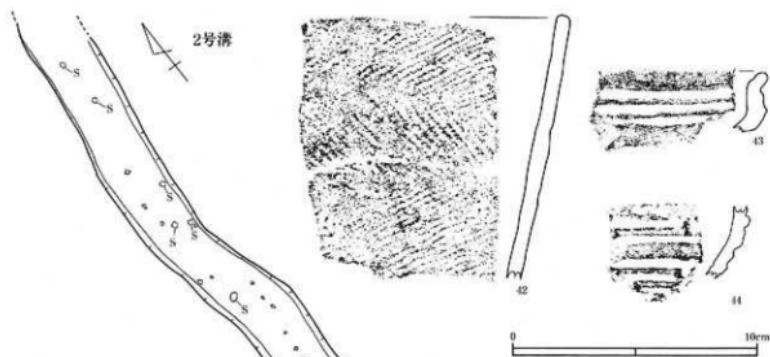
②頸部無文で平口縁のもの(65)。

③4単位の波状口縁となっているものでは、58の地文のみのものや59・61の変形工字文が描かれているものがある。

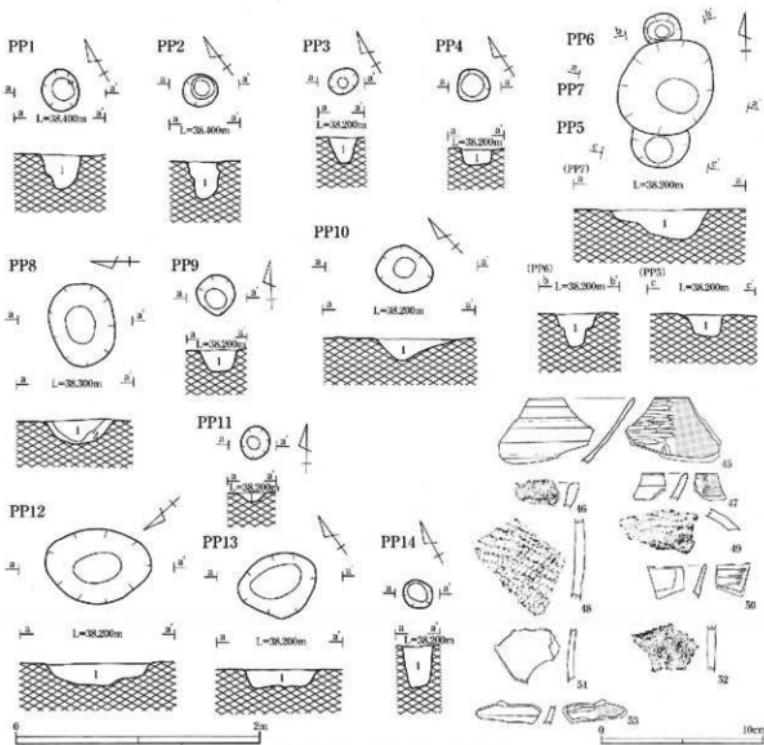
④その他 深鉢もしくは壺で上記のグループに入らないものである。



第16図 1号溝・出土遺物



第17図 2号溝・3号溝・出土遺物



第18図 柱穴状ピット・出土遺物

遺構	検出地点	上端×下端×深	剖面番号	土 状 況	
				粘性	含水率
PP 1	I A 1 g	34×18×28	32	10YR 2 / 3 黒褐色 10YR 5 / 4 にぶい黄褐色砂質土ブロック状に入る	粘性・しまりあまりなし 径1~5mmの炭化物10%含む
PP 2	T A 1 g	29×15×30	60・33	10YR 2 / 3 黒褐色 10YR 3 / 3 黒褐色 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色砂質土ブロック状に入る	粘性・しまりややあり 炭化物径3~5mm 1%含む
PP 3	I A 1 g	25×10×27			
PP 4	T A 10 f	27×20×14		1, 10YR 3 / 3 暗褐色 1, 10YR 3 / 3 暗褐色 1, 10YR 4 / 3 黄褐色シルト	(粘性なし・しまりあり) 主体に10YR 5 / 4 にぶい 黄褐色シルトが10%入る泥土 2, 握りすぎ
PP 5	I B 6 h	47×23×18		10YR 3 / 4 暗褐色 10YR 3 / 4 暗褐色	(粘性・しまりややあり) と10YR 3 / 3 暗褐色 (粘性・ しまりあり)との混じ 酸化鉄混じり
PP 6	T B 6 h	31×12×26		10YR 3 / 4 暗褐色 10YR 3 / 3 暗褐色	粘性・しまりあり 酸化鉄斑状に入る
PP 7	I B 6 h	87×35×23	61	10YR 3 / 3 ~ 2 / 3 暗褐色 1, 10YR 3 / 4 暗褐色	黒褐色 粘性わずかにあり しまりあり
PP 8	I B 6 i	68×30×20		1, 10YR 4 / 3 ~ 4 / 4 にぶい黄褐色 10YR 4 / 3 ~ 4 / 4 にぶい黄褐色	~褐色シルト 粘性なし しまりあり
PP 9	T A 10 f	34×18×19		10YR 4 / 4 暗褐色 10YR 3 / 3 暗褐色砂質土	粘性なし しまりあり 炭化物微量含む
PP 10	B 9 i	45×18×17	62	10YR 4 / 4 暗褐色 10YR 3 / 3 暗褐色砂質土	粘性なし しまりあり 炭化物ごく微量に含む
PP 11	A 10 f	27×12×8	34	10YR 3 / 3 暗褐色砂質土	粘性なし しまりあり 炭化物微量に含む

第3表 桂穴状ピット表(1)

遺構	検出地点	上幅×下幅×深	遺物番号	堆土状況
P P12	I C 6 a	87×40×19		10YR 3/1 黒褐色と10YR 4/4 棕褐色との混土 上位は粘性なし しまりあり 下位になるに従って粘性増す 全体に酸化鉄少量含む
P P13	I B 10 g	66×45×15	59	1. 10YR 3/3~2/3 暗褐色~黒褐色 粘性・しまりややあり 2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色と10YR 3/3 暗褐色の混土 砂質土 粘性・しまりあり
P P14	I A 10 f	36×18×14	63・35	10YR 3/3 暗褐色 (粘性なし しまりややあり) と10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト (粘性なし しまりややあり)との混土 炭化物微量に含む 土器片含む

第4表 柱穴状ビット表 (2)

b: 壺

①細く浅い沈線による菱形文や変形工字文、弧状文が描かれるもの (57・68)。②その他

c: 浅鉢 浅鉢は遺構に伴うものがほとんどで遺構外出土遺物の浅鉢で掲載したものは1点のみである。

①変形工字文が描かれているもの (56)。

d: その他 繩文時代晩期～弥生時代の時期に入ると思われるが磨滅や小破片のため器種が断定できないものである。遺構内出土の土器に若干ある。

II群 土器類須恵器 土器類 (A) はロクロ使用のもののみでa 壺とb 壺が出土している。また須恵器 (B) はa 壺、b 壺、c 壺が出土している。

II A a 類の土器類の壺はいずれも回転糸切りによって切り離され内面が黒色処理を施されたもの (①) も少なくない。壺は①肩部のあたりにタタキ調整を行った痕が残っているものと②そうでないものとに分けられる。

II B a 類の須恵器の壺は底部が①へら切りのものと②回転糸切りのものとがある。85は大壺の破片で平行叩き目文による調整痕と内面の當て具痕が残っている。

平安時代の遺物は全てロクロ作りで壺に関しては、へら切り（僅少）と回転糸切りが混在している。底部の残っているものの中では底部の再調整されたものは見あたらず、また器形などからも9世紀後半以降の可能性がある。ただし、壺について見るとロクロ調整がなされる前の工具によるタタキが見られ、やや9世紀代でも前半の様相を残している。今回の調査では、完形品もなく出土数も少ないため、ここでは詳しい時期区分は避け9世紀代の遺物としたい。

III群 繩文時代晩期前葉の土器で、今回の調査では2点のみ出土している。磨滅しており明確ではないが、玉抱三文文と見られる文様を持つ54・55がここに含まれる。これらの土器は同一個体の可能性が高い。

2) 石器

石器も土器と同様出土量が少なく遺構内出土も含めて55点である。石器ばかりでなく調査区域内からはフレークやチップ類も大変少なかった。器種としては、石鎌、石錐、搔器、石斧、磨石等である。石鎌はいずれも有茎である。石錐は摘み状の頭部を持っている。錐部はあまり長くない。磨石はさほど大きくない。21の石斧は若干欠損しているが、長さ5cmで厚さも薄く実用品として使用されたとは考えにくい。一部しか出土しなかった20も同様である。

遺物の出土状況を見ると、遺構外出土は遺構周辺に限られ、I群である繩文時代晩期～弥生時代前半の土器や石器は土坑周辺に、II群の土器類須恵器は堅穴住居跡や堅穴状遺構、柱穴状ビット周辺に出土している。擾乱等の影響があるかもしれないが、基準点周辺には遺構遺物がほとんど出土していない。

V まとめ

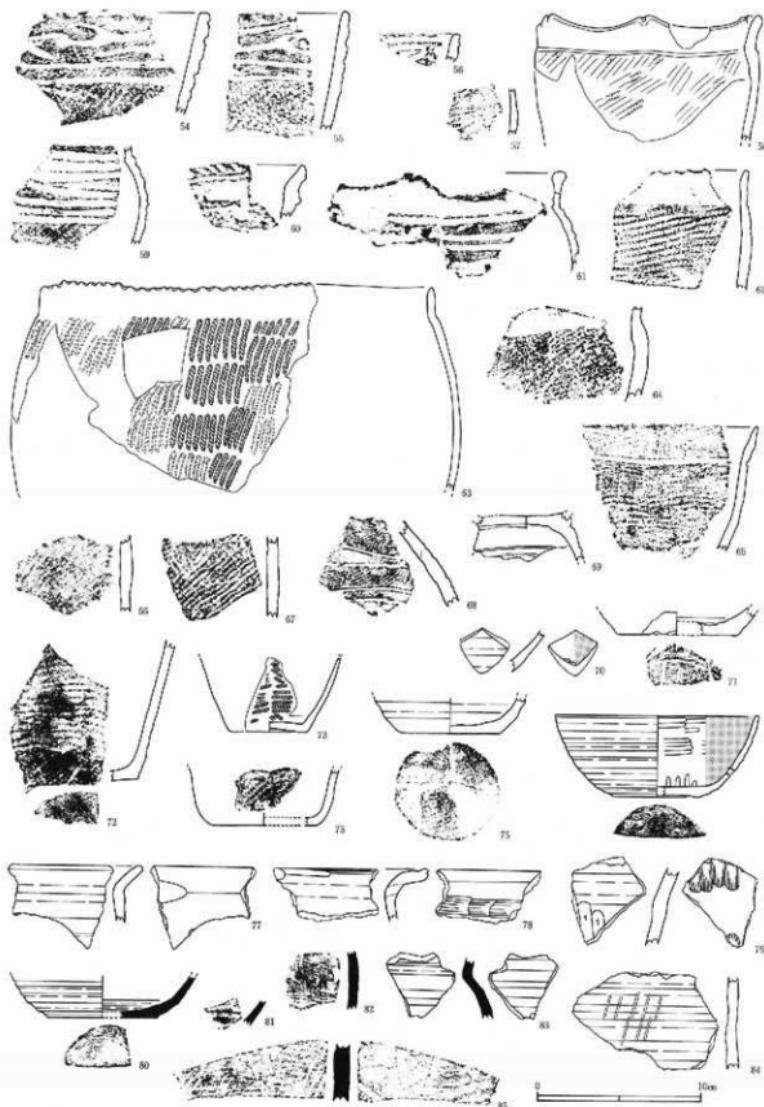
今回の調査では、擾乱の影響を受けている場所も多く、決して保存状態は良いとは言い難い。しかし、このようなかでも検出された遺構から縄文時代末～弥生時代にかけての時期と平安時代の時期との2時期にこの地で人々が生活を営んでいたことがわかった。

縄文時代末～弥生時代の遺物は、縄文時代晩期に見られる小波状口縁の深鉢が今回の出土量の中では多く出土しており、縄文時代晩期が中心とも考えられる。しかし、10号土坑から出土した23や57・68は和井内東遺跡から出土している土器と類似しており、1号土坑から出土した6などを見ると弥生時代と見られるものも出土している。ただし、これら後者の土器は同グリットの同レベルで前者の土器とともに出土しており、両者を明確に分けられる程の遺物の出土量や出土状況に至らず、今回は縄文時代末～弥生時代前半とひとつに括ることにした。

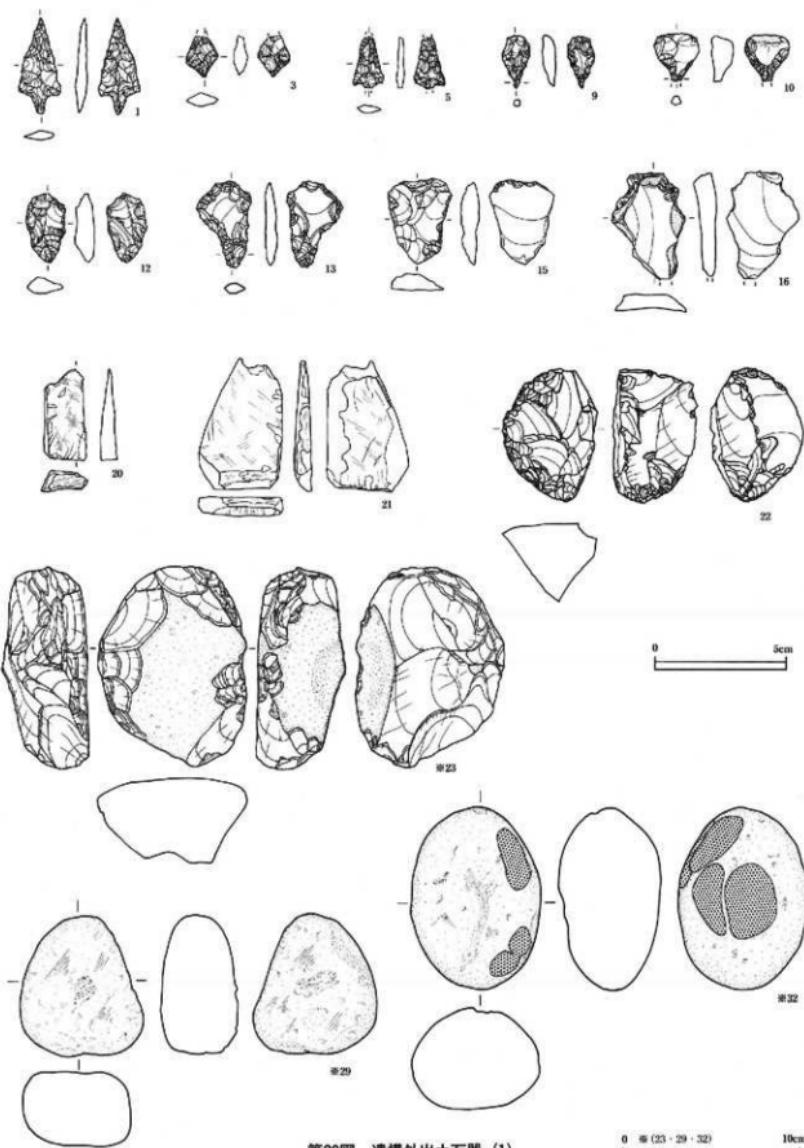
遺構については、3号土坑や10号土坑などは形状からいって風倒木痕の可能性もやや否めない。しかし、それ以外の土坑は多少の規模の違いはあるものの楕円形の土坑が多い。土坑の数のわりには住居跡は検出されず、防護穴のような施設とは違った用途を持つ施設とも考えられる。特に15号土坑はセットと見られる石皿と磨石が置かれたように並んで出土しており、そこには意図的な行為を感じられる。また、擾乱の影響があるにせよ、基準点1の周辺は遺構の存在を全く感じさせず、当初から遺構が作られていない可能性が高い。一定の指向性などは見られないが、それを囲むように土坑が検出していると考えた場合、今回調査区域内外には検出されなかった住居跡がどのように検出されるかが興味深いところであり、今後周辺区域の調査が期待される。

＜参考文献＞

- 1977 高橋 信雄 「岩手県のロクロ使用土器について」 考古風土記 第2号
1978 沼山源喜治 「歴史時代土器の研究 I - 東日本に於ける土器翻年一」 歴史時代七器研究会
1993 八木 光則 「古代斯波都と葦原体の土器様相」 第18回古代城柵官衙遺跡検討会
1997 小田野哲憲 「岩手の弥生式土器翻年試論」 岩手県立博物館研究報告第5号 岩手県立博物館
1985 小田野哲憲 「岩手県新里村和井内東遺跡出土の土器」 日高見国・磐梯齊治郎字兄達層記念論集
瀬戸哲治郎字兄達層記念会
1986 地震田B遺跡 秋田新都市開発整備事業関係課成文化財発掘調査報告書 秋田市教育委員会
1980 横山 浩一 「須恵器の叩き目」 九州大学史論第117号
1982 高橋 信雄 小田野哲憲 猪谷常正『岩手の土器』 岩手県立博物館
1989 相原 康二 「岩手県内における弥生時代の石器組成について」 紀要直
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文財センター
1981 相原 康二 「県南部における古代の土器叩き目試案」 東北縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書XⅠ
岩手県文化財調査報告書第60号 岩手県教育委員会
1994 斎藤邦雄・酒井宗孝 「岩手県の縄文期鋤削製造構について」 北奥古代文化第23号 北奥古代文化研究会

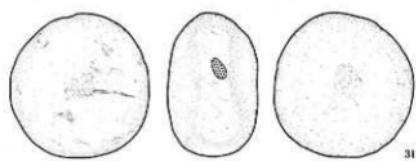


第19図 遺構外出土土器

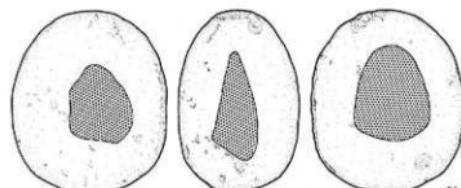
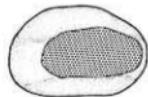


第20図 遺構外出土石器 (1)

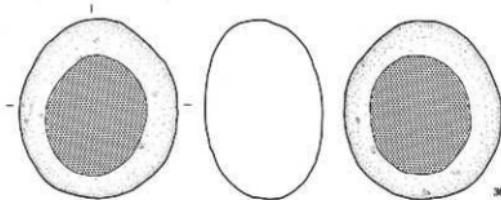
0 ~ (23・29・32) 10cm



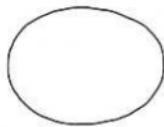
31



34



36



第21図 遺構外出土石器 (2)

番号	出土場所・その他	形種	部位	文様・その他	内面	分類	既版等回
1	1号土坑 墓土	深鉢	口一底	し良模文 頸部無文 口唇部押込による小成状口縁 木柴底	ナデ	Ia1	6 9
2	1号土坑 墓土	深鉢	口一底	し良模文 頸部無文 口唇部押込による小成状口縁	ナデ	Ia1	6 9
3	1号土坑 墓土中位	浅鉢	口一底	口唇部押込による小成状口縁	ナデ	Ia1	6 9
4	1号土坑 墓土中位	深鉢	肩部	L.R模文	ナデ	Ia1	6 9
5	1号土坑 墓土中位	深鉢	肩部	L.R模文	ナデ	Ix4	6 9
6	1号土坑 墓土中位	浅鉢	口縁部	次絞部 4單位? 口縁にあわせて沈線	Ie2	Ie2	6 9
7	2号土坑 墓土上位	浅鉢	口縁部	口縁部押込による小成状口縁 L.R模文	Ia4	Ia4	7 9
8	2号土坑 墓土上位	深鉢	口縁部	変形工字文	ナデ	Ib1	7 9
9	3号土坑 墓土下部	浅鉢	口縁部	頭部の2条の平行沈縁 L.R模文	ナデ	Ia2	7 9
10	3号土坑 墓土上位~中位	浅鉢	肩部	無文	ナデ	Ib2	7 9
11	3号土坑 墓土上位	鉢	肩部	小幅 变形工字文の可能性有り	Ia4	Ia4	7 9
12	3号土坑 墓土中位	亞	口縁部	平行沈縁	Ib1	Ib1	7 9
13	3号土坑 墓土上部	浅鉢	口縁部	6単位(?)の波状口縁突起部 変形工字文	Ic1	Ic1	7 9
14	3号土坑 墓土中位	深鉢	肩部	L.R模文	Ia4	Ia4	7 9
15	3号土坑 墓土上位	浅鉢	口縁部	4単位(?)の波状口縁 突起頂部押込	ミガキ	Ic1	7 9
16	3号土坑 墓土中位	鉢	肩部	無文	ナデ	Ia1	7 9
17	4号土坑 墓土上部	鉢?	肩部	無文	ミガキ	Ib2	8 9
18	5号土坑 墓土中位	裏	肩部	内外部もヘラナデ	ナデ	IIAb	8 9
19	6号土坑 墓土中位	深鉢	肩部	L.R模文	ナデ	Ia4	9 9
20	7号土坑 墓土	亞	口縁部	L.R模文	I	I	9 9
21	10号土坑 墓土中位	亞	腹~肩	無文	ナデ	Ib	10 9
22	10号土坑 墓土上部	亞	腹~底	頭部沈縁	Ib	Ib	10 9
23	10号土坑 墓土中位	亞	口一側	1単位の横状凹状口縁心円文 頸部平行沈縁 横曲状文 網代改	Ib1	Ib1	10 10
24	10号土坑 墓土中位	深鉢	肩部	L.R模文 裂縫み痕残る	ナデ	Ia	10 10
25	12号土坑 植出圓	鉢?	肩部	無文	I	I	11 10
26	15号土坑 植出圓	深鉢	肩部	無文	ナデ	Ia	12 10
27	15号土坑 墓土上位	深鉢	肩部	L.R模文	ナデ	Ia	12 10
28	鷹穴住居 床蓋	坏	体~底	口縁部糸切り痕	ナデ	IIBa	14 10
29	鷹穴住居 床蓋	坏	口~体	広がりを持つ立ち上がり	ナデ	IIBa	14 10
30	鷹穴住居 陶片付近底	坏	体~底	十箇筋 ロクロ 「縦彫網」外反	NA	IIAs	14 10
31	鷹穴住居 床蓋	坏	口~底	口縁部向かってやや内海気味 ロクロ	NA	IIAs	14 10
32	鷹穴住居 床蓋	坏	口縁部	内海 ハラマ部内面横溝のハラミガキ	ミガキ	IIAa1	14 10
33	鷹穴住居 カマドバードル	亞	肩部	小型窓 ロクロ	ナデ	IIAb	14 10
34	鷹穴住居 P 9	亞	口縁部	須恵器 口縁部クの字 内面自然釉	ナデ	IIEc	14 10
35	鷹穴住居 P 1	坏	口~底	須恵器 ハラ切り 無調整 内海氣味 付着物有り	NA	IIAa1	14 10
36	鷹穴住居 床蓋	坏	口縁部	ハラケズリ 内面輪積み痕跡の 内面ヘラナデ	ナデ	IIAb2	14 10
37	鷹穴住居 床蓋	坏	口~側	タクネキ痕跡の 肩部ヘラマリ 口縫部外反	NA	IIAb1	14 10
38	鷹穴住居 P 24	坏	口~底	ロクロ 面輪み切り痕 ハラマ部翅く若干外反	ナデ	IIAs	14 10
39	鷹穴住居 P 13, 16~18	裏?	肩部	ケズリ痕跡	ナデ	IIAb	14 10
40	伴併扶蘇器	裏?	肩部	ロクロ 円窓に種子痕(?) 残る	ナデ	IIAb	15 10
41	1号房	口縁部	無	輪積み痕残る	I	I	16 10
42	T H 6 f	深鉢	口~底	羽状縫縁	ナデ	Ta2	17 10
43	2号房	深鉢	口縁部	平行沈縁	ナデ	Ic1	17 10
44	2号房	深鉢	肩部	工字文	ミガキ	Ic1	17 11
45	P 1	墓土下部	坏	II縁部 内風 内室横縫のハラミガキ 手厚	ミガキ	IIAa1	18 11
46	P 2	墓土中位	口縁部	無文	I	I	18 11
47	P 2	埋土上部	坏	口縁部 内窓 内面横縫のハラミガキ 手厚	ミガキ	IIAa1	18 11
48	P 3	埋土上部	深鉢	口縁部 L.R模文	ナデ	Ia1	18 11
49	P 10	墓土上位	口縁部	無文 ナラ調整	Ib1	Ib1	18 11
50	P 11	墓土中位	坏	口縁部 内面横縫のハラナデ	ナデ	IIAa	18 11
51	P 13	埋土上部	肩部	無文	I	I	18 11
52	P 14	埋土上位	肩部	變形文	I	I	18 11
53	P 14	壁上中位	坏	体部 内面横縫のハラミガキ ロクロ	ミガキ	IIAa1	18 11
54	I B 6 h	埋土	口縁部	三叉文	ミ	19 11	
55	I B 6 h	埋土	口縁部	三叉文	ミ	19 11	
56	I B 6 d	鉢	口縁部	変形工字文	Ic1	Ic1	19 11
57	I B 7 k	直筒	肩部	變形文	Ib1	Ib1	19 11
58	I B 2 h	陶瓶	口縁部	1単位の小波状コロ 突起部押込による割み日	ナデ	Ia3	19 11
59	I B 6 d	深鉢	口縁部	変形工字文? 褐化付着物有り	ナデ	Ia3	19 11
60	I C 7 b	直筒	口縁部	口唇部削み	ミガキ	Ia1	19 11
61	B B 2 h	直筒	口縁部	波状口縁 变形工字文	ナデ	Ia3	19 11
62	I B 7 h	直筒	口縁部	口唇部押込による小波状口縁 頸部無文 L.R模文	Ia1	Ia1	19 11
63	I B 2 h	複乱	口縁部	頸部無文 L.R模文 頸部による小波状L.I縁 槌付着	Ia1	Ia1	19 11
64	I B 6 d	深鉢	口縁部	三叉文 L.R模文	Ia	Ia	19 11
65	J 筒形場	深鉢	口~底	頭部沈縁 L.R模文	ナデ	Ia2	19 11
66	I H 6 e - 6 f	肩部	肩部	無文	Ia	Ia	19 11
67	I B 7 f	復乱	肩部	L.R模文	ナデ	Ia	19 11
68	6号土坑 墓土	亞	肩	浅い沈痕 沈痕間 L.R模文 斜糸文木漏処理痕	ナデ	Ib1	19 11
69	I B 7 f	複乱	高台部	平行沈縁	Ib	Ib	19 11

第5表 土器観察表(1)

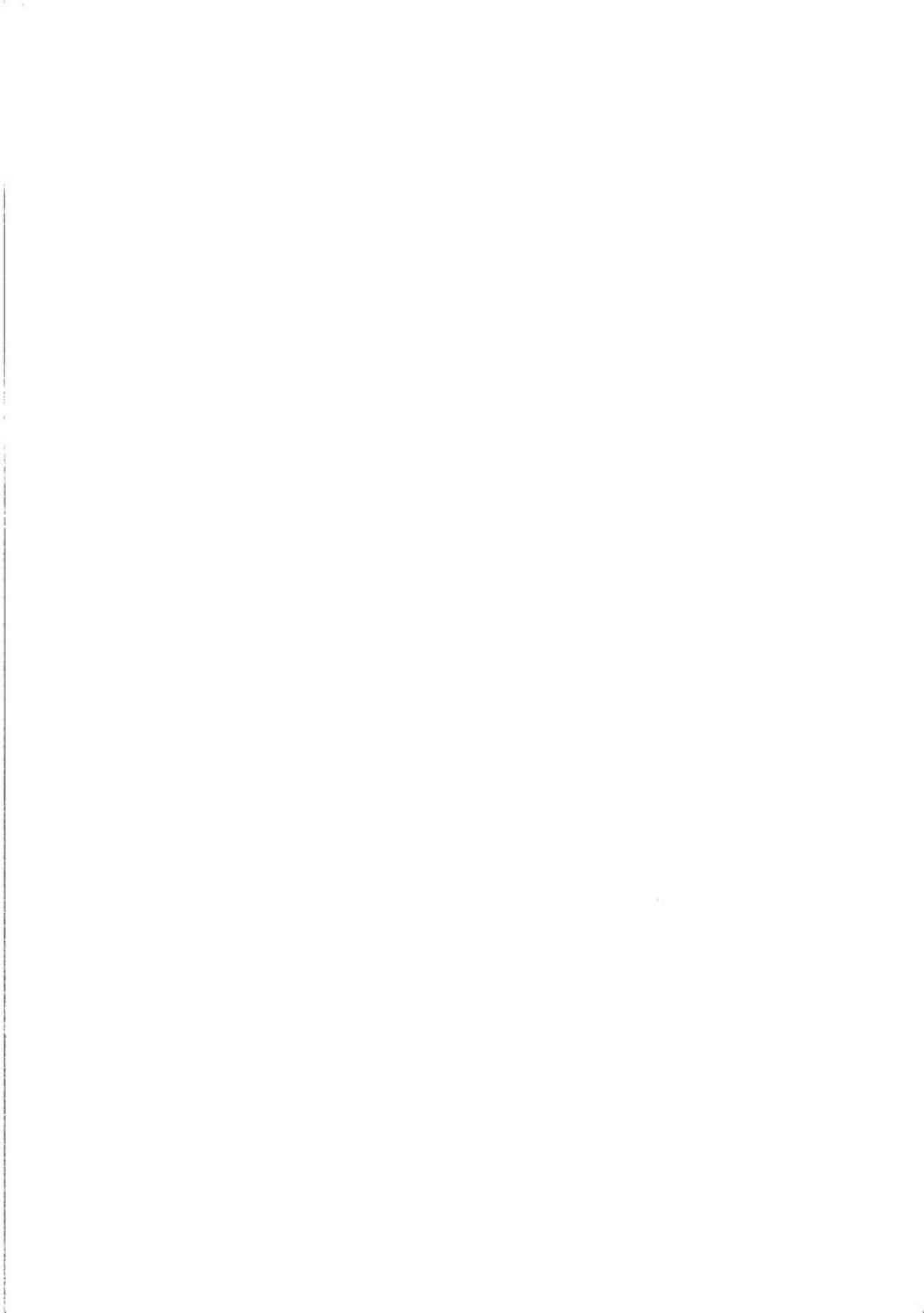
70	T H 6 e	直房	坏	体部	内墨 外墨一部ヘラナデ		ミガキ	II Aa 1	19 11
71	I B 7 j	直屋	坏	底部	四輪系切り痕		ミガキ	II Aa	19 11
72	I B 6 f	直屋	漆跡	底	L R構文 油垢木裏痕		ナデ	II a	19 11
73	I B 2 h	搅乱	漆跡	底一底	L R構文		ナデ	II a	19 12
74	I B 2 g	搅乱	漆跡	底部	L R構文		ナデ	II a	19 12
75	T H 7 i	坏	条部	ロクロ 回転系切り痕		ナデ	II Aa	19 12	
76	II A 1 h	直屋	坏	口一底	ロクロ 斜状紋、横間にヘラミガキ 四輪系切り痕		ミガキ	II Aa 1	19 12
77	I C 区	直屋	美	口漆部	ロクロ 外反		ナデ	II A5	19 12
78	T A 1 f	直房	美	口漆部	ロクロ 外反		ナデ	II Ab	19 12
79	I B 1 g	直屋	美	漆跡	ロクロ ヘラケズリ		ナデ	II Ab	19 12
80	I C 区	直屋	坏	外一底	四輪系切り痕 内透気溝			II Ba 2	19 12
81	I C 区	直屋	坏	体部				II Ba	19 12
82	I H 8 b	直屋	美	朝部				II Bb	19 12
83	T H 7 i	直屋	破	条一舌				II Bc	19 12
84	I A 1 h	直屋	美	制部	タキキ痕 内面付着物有り		ナデ	II Ab 1	19 12
85	I B 5 a	1号	美	朝部	大毫 平行削き口文 内面当て其痕			II Db	19 12
86	I B 7 a - g	搅乱	1号	朝部	写真のみ				12
87	I B 10 b	搅乱	舌	朝部	写真のみ				12
88	I B 7 k	直屋	制部	体部					12
89	I B 10 b	1号	舌	体部	写真のみ				12
90	I T A 区	直屋	舌	体部	写真のみ				12

第6表 土器観察表(2)

番号	出土地点・坑位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 質	巣川地	回復	写真	
1	I B 6 d	直屋	石錐	3.6	1.5	0.4	1.4	青岩	北上山地	20 13	
2	1号土坑 坑土	石錐	2.1	0.8	0.3	0.5	青灰岩		12	13	
3	II B 2 j	直屋	石錐	1.6	1.2	0.5	0.7	土錐		20 13	
4	1号土坑 燐土	石錐	2.6	1	0.7	1	褐灰岩		12	13	
5	II C 1 e	直屋	石錐	2	1.1	0.25	0.7	青岩	北上山地	20 13	
6	6号土坑	石錐	3.8	2.1	0.55	3.2	青岩	北上山地	8	13	
7	整穴住居跡 壁上	石錐	4.9	1.1	0.7	3.6	青岩	北上山地	14	13	
8	整穴住居跡 壁土	石錐	2.9	1	0.3	1.2	青岩	北上山地	14	13	
9	II B 14	直屋	石錐	2	1	0.5	0.8	青岩	北上山地	20 13	
10	I C 1 b 0 b	直屋	石錐	1.8	1.7	0.7	2	青岩	北上山地	20 13	
11	整穴住居跡 壁上	石錐	2.2	1.9	0.7	1.8	青岩	北上山地	14	13	
12	I B 1 b 0 b	搅乱	石錐	2.6	1.5	0.7	2.9	土錐		20 13	
13	I D 7 a	直屋	石錐	3.3	2	0.4	3.2	青岩	北上山地	20 13	
14	3号土坑 壁上	石錐	2.5	1.9	0.8	3.3	赤色油粒珠質青岩とめのう	北上山地	8	13	
15	T H 7 e	直房	3.3	2.4	0.7	5.6	青岩	北上山地	20	13	
16	I B 6 i	搅乱	4.1	2.7	0.7	8	青岩	北上山地	20	13	
17	整穴住居跡 壁面	石錐	1.9	1.4	0.5	1.4	土錐		14	13	
18	1号土坑 壁上	石錐	1.5	1.9	0.3	1.1	青岩	北上山地	11	13	
19	1号土坑	石錐	7.4	5.4	1.2	59.9	青岩	北上山地	11	13	
20	I B 7 a	搅乱	3.5	1.5	0.6	4.8	青岩	北上山地	20	13	
21	I B 6 c	搅乱	5	3.1	0.7	15.8	青岩	北上山地	20	13	
22	I B 7 f	1房	5.1	3.1		54.3	青岩	北上山地	20	13	
23	I C 9 a	搅乱	磨石	11.5	8.6	4.9	580	安山岩	奥羽山脈	20 13	
24	1号土坑 磨土	磨石	9.5	8.9	2.8	320	若岩	北上山地	6	13	
25	7号土坑 壁上	磨石	9.8	11.4	3.8	550	安山岩	奥羽山脈	9	13	
26	1号土坑 磨土	磨石	9.5	7.2	5.2	370	安山岩	奥羽山脈	6	13	
27	3号土坑 磨土	磨石	11	7	5.7	550	安山岩	奥羽山脈	8	14	
28	1号土坑 壁上	磨石	10.7	9.5	5.2	680	安山岩	奥羽山脈	11	14	
29	II B 2 d	搅乱	磨石	8	7.1	4.3	340	安山岩	奥羽山脈	20	14
30	1号土坑 磨土	磨石	8.2	6.8	4.8	330	安山岩	奥羽山脈	6	14	
31	I B 5 j	直屋	磨石	8.9	8.5	5.5	620	安山岩	奥羽山脈	20	14
32	I B 9 b	1房	磨石	10.4	7.4	5.8	270	安山岩(濁石)	奥羽山脈	20	14
33	整穴住居跡 磨土	磨石	3.9	7.4				奥羽山脈	14	14	
34	II B 2 h	搅乱	磨石	11.1	9.6	7.5	1190	安山岩	奥羽山脈	20	14
35	3号土坑 壁上	磨石	10.3	9.3	6.8	940	安山岩	奥羽山脈	8	15	
36	T H 8 i	搅乱	磨石	10.9	9.6	7.2	1070	安山岩	奥羽山脈	20	15
37	1号土坑 磨土	磨石	12.3	11.4	6.7	1660	安山岩	奥羽山脈	12	15	
38	1号土坑 壁上	磨石	20.6	29.2	8.7	6540	安山岩	奥羽山脈	12	15	
39	①T H 8 i	搅乱				32.8	磨岩	北上山地	J5		
39	②I B 8 i	搅乱				5.6	青岩	北上山地	15		
39	③I B 8 i	搅乱				38	青岩	北上山地	15		
39	④I B 8 i	搅乱				4.6	青岩	北上山地	15		
40	I B 6 h	直房				300	青岩	北上山地	15		
41	I B 6 i	搅乱				60.4	赤色油粒珠質青岩とめのう	北上山地	15		

第7表 石器観察表

写真図版





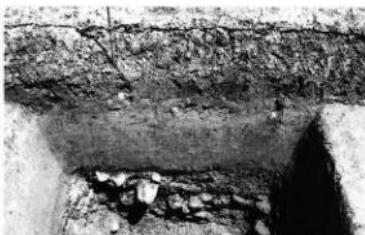
調査区遠景



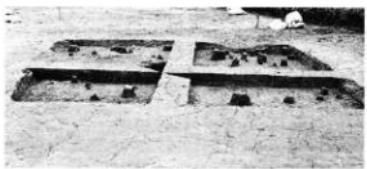
調査区近景
写真図版1 調査区遠景・近景



調査前風景（北→）



基本層序



竪穴住居跡断面（東西）



竪穴住居跡断面（南北）



竪穴住居跡カマド縦断面



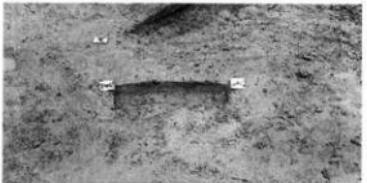
竪穴住居跡カマド横断面



竪穴住居跡・旧煙出し断面



竪穴住居跡焼土検出状況



竪穴住居跡・焼土断面①



竪穴住居跡焼土断面②

写真図版2 調査前風景・基本層序・竪穴住居跡①



竪穴住居跡 完掘



竪穴住居跡 遺物出土状況



竪穴状遺構 断面（東西）



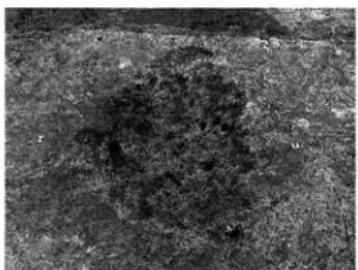
竪穴状遺構 完掘



竪穴状遺構 断面（南北）



1号土坑 断面



1号土坑 完掘



1号土坑 遺物出土状況

写真図版3 竪穴住居跡②・竪穴状遺構・1号土坑



2号土坑 完掘



2号土坑 断面



3号土坑 完掘



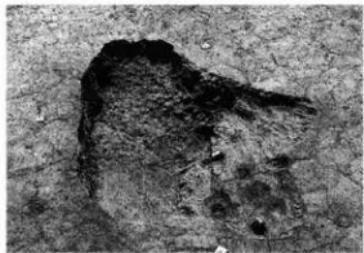
3号土坑 断面



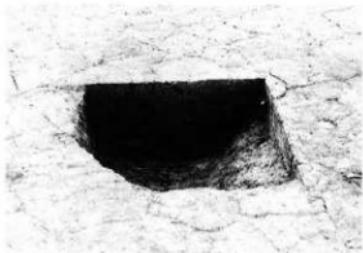
4号土坑 完掘



4号土坑 断面



6号土坑 完掘



6号土坑 断面

写真図版4 2号土坑~6号土坑



7号土坑 完掘



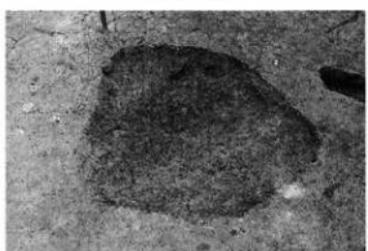
7号土坑 断面



8号土坑 完掘



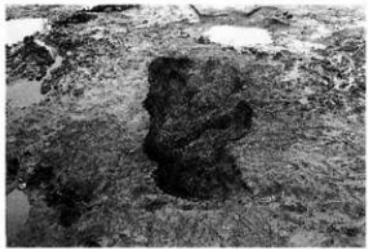
8号土坑 断面



9号土坑 完掘



9号土坑 断面

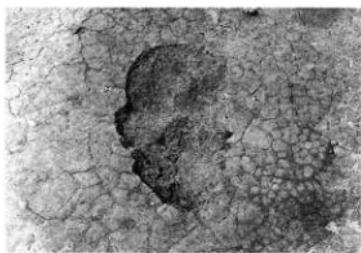


10号土坑 完掘

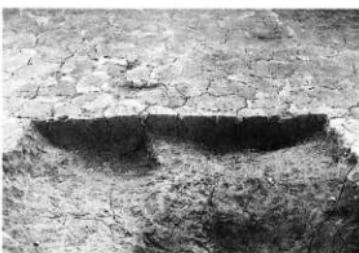


10号土坑 断面

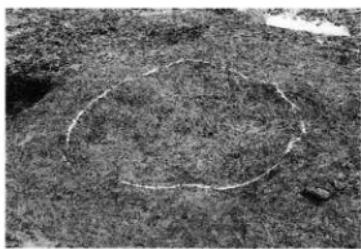
写真図版5 7号土坑~10号土坑



11号土坑 完掘



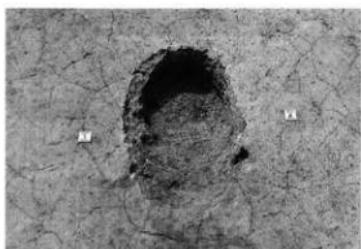
11号土坑 断面



12号土坑 完掘



12号土坑 断面



13号土坑 完掘



13号土坑 断面



14号土坑 完掘



14号土坑 断面

写真図版 6 11号土坑～14号土坑



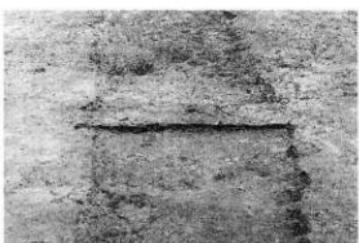
15号土坑 完掘



15号土坑 断面



1号溝 完掘



1号溝 断面



2号溝 完掘



2号溝 断面



3号溝 完掘

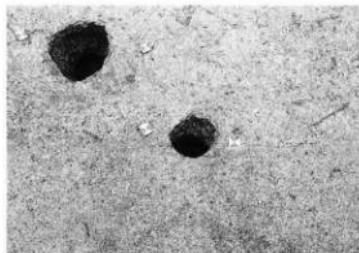


3号溝 断面

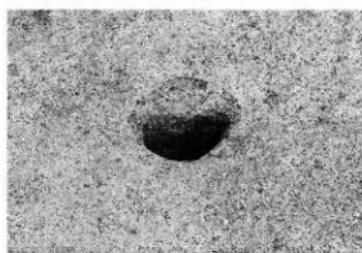
写真図版 7 15号土坑・溝



PP1 完掘



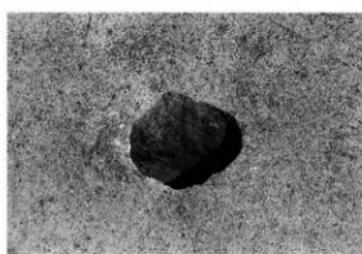
PP2・PP3 完掘



PP3 断面



PP4 完掘



PP14 完掘



PP8 断面

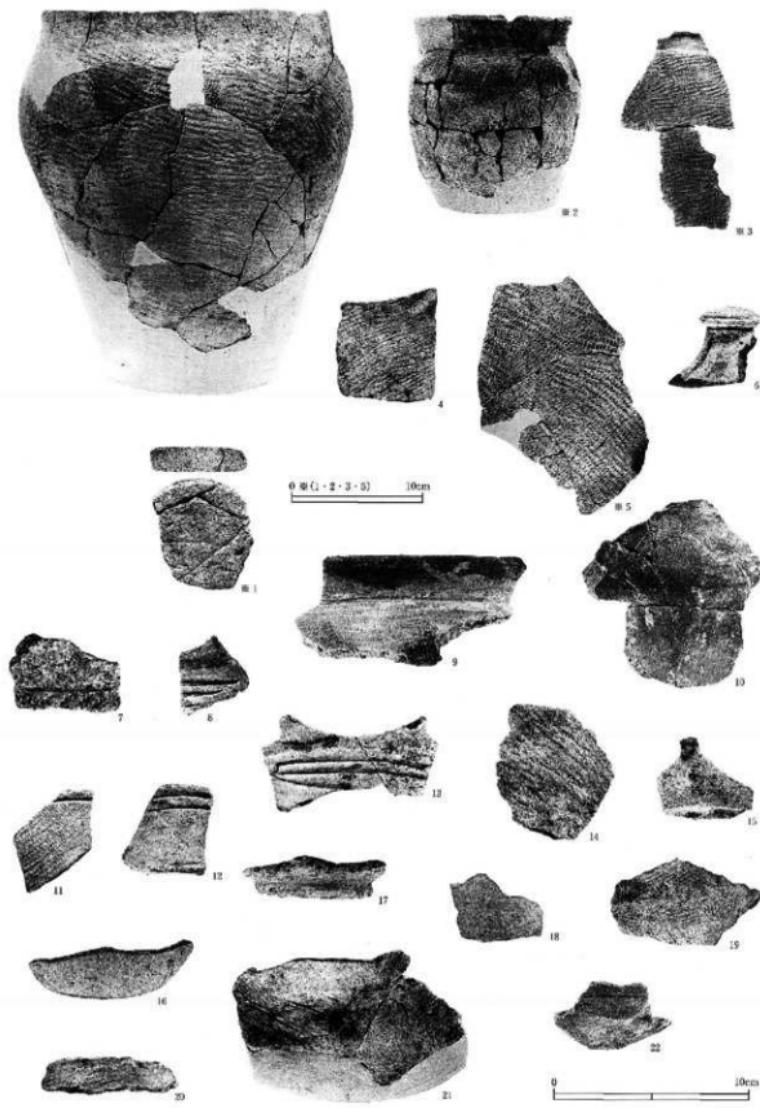


調査区周辺（西→）

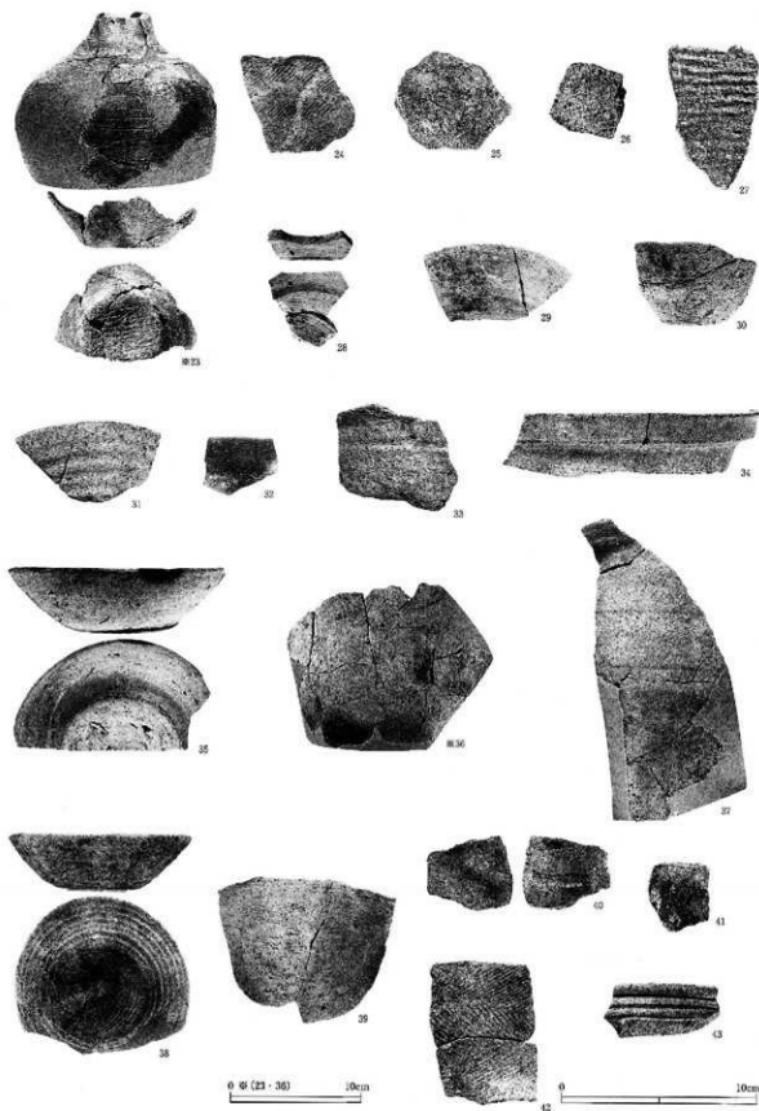


調査区周辺（東→）

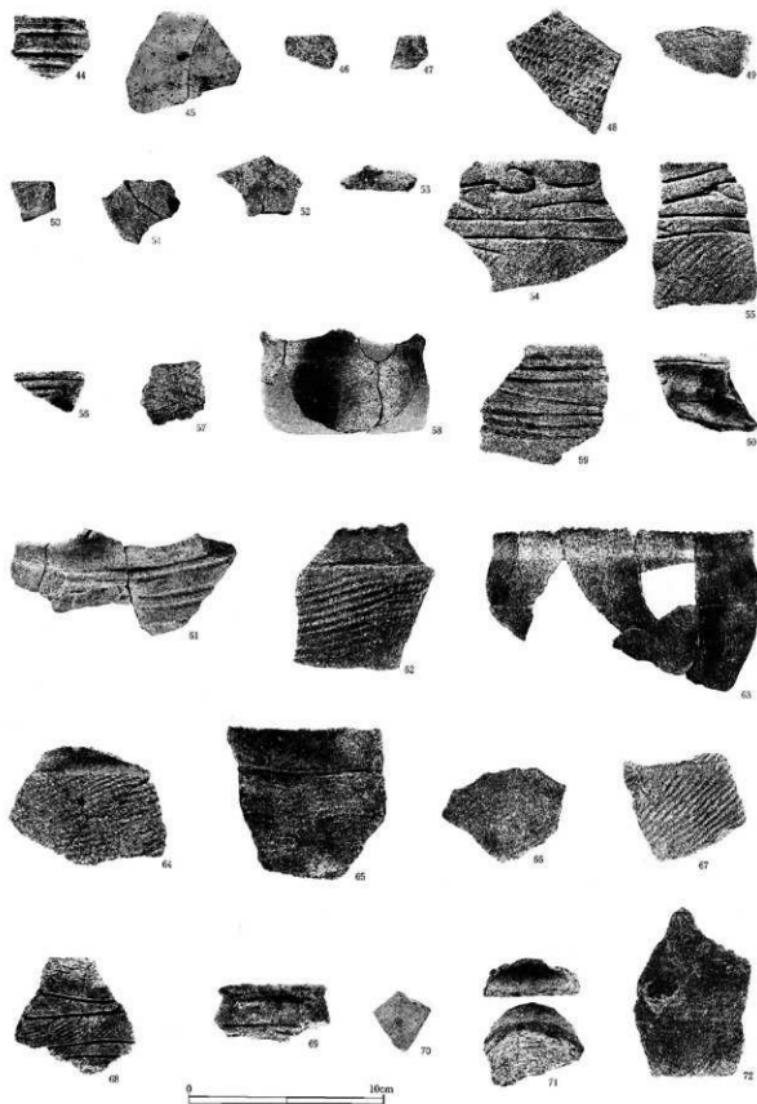
写真図版 8 柱穴状ピット・調査区周辺状況



写真図版9 出土土器 (1)



写真図版10 出土土器 (2)



写真図版11 出土土器 (3)

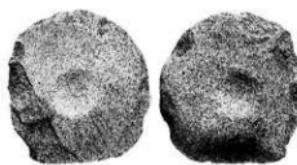
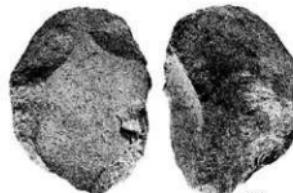


0 10cm

写真図版12 出土土器 (4)



0 10cm



23

24

0 10cm

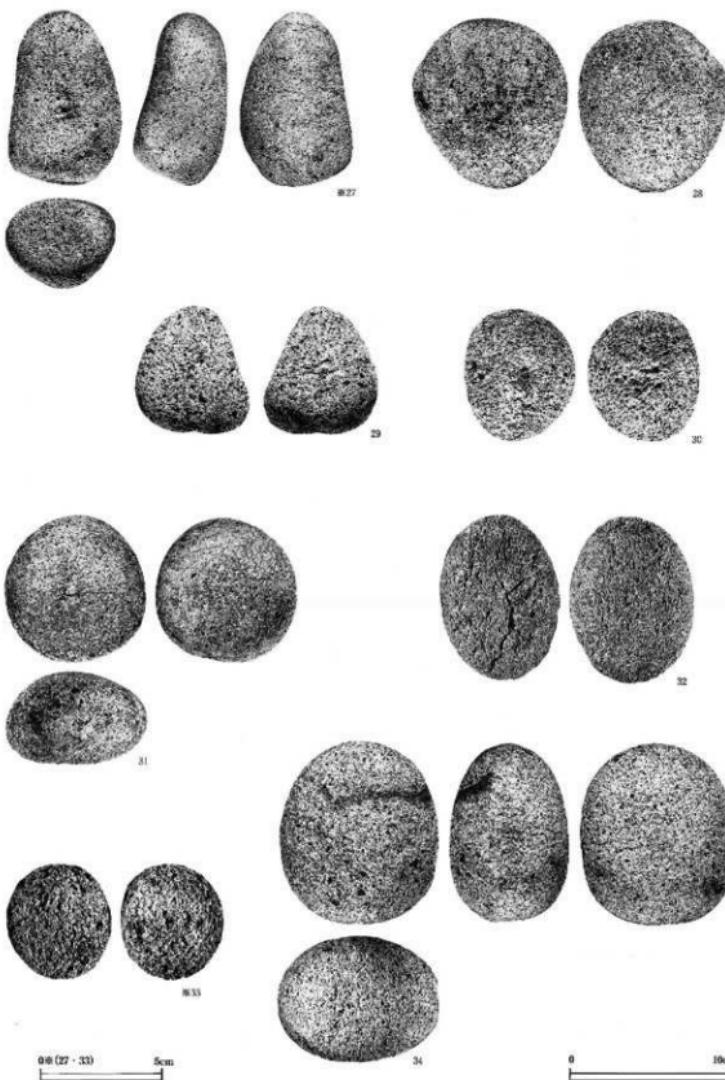


25

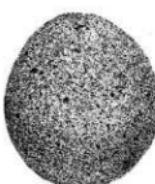
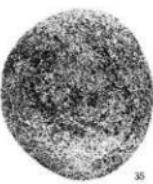
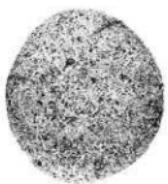


26

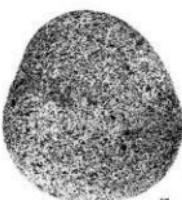
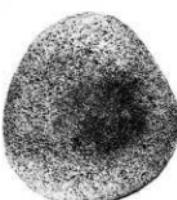
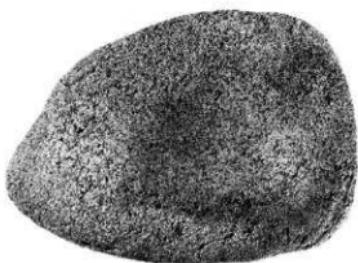
写真図版13 出土石器 (1)



写真図版14 出土石器 (2)



0(35・36・37) 10cm



37



39



39



39①



39②



39③

0(38・40) 10cm



40



41

0(39・41) 5cm

写真図版15 出土石器 (3)

報告書抄録

ふりがな	そうせんちょういせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	懇前町遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般国道4号水沢東バイパス改築工事乗用車道遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第314集							
編著者名	木戸口俊子 佐々木志麻							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯間11-185 ☎ 019(638)9001							
発行年月日	西暦2000年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	°	'	°	'			
懇前町遺跡	岩手県水沢市 佐倉河字 懇前町15-1	03204	NE17-1026	39° 09' 00"	141° 09' 00"	1998年 6月30日 ～ 9月1日	2,700m ²	一般国道4号 水沢東バイパス改築工事 乗用車道に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
懇前町遺跡	縄文時代 晩期末 ～ 弥生時代 平安時代	土坑 竪穴住居跡 竪穴状遺構 溝 柱穴状ピット	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器					

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長佐藤基司
副所長伊藤直司

「管理課」

德志加多勝

嘱託藤烏恵子
タクシードウイチコ

〔調查第一課〕

〔調查第二課〕

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第314集

惣前町遺跡発掘調査報告書

一般国道4号水沢東バイパス改築工事事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年3月17日

発行 平成12年3月24日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL 019 (638) 9001
FAX 019 (638) 8563

印刷 川鶴印刷株式会社
〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
TEL 0191 (46) 4161
FAX 0191 (46) 4165

